

北陸新幹線関係発掘調査報告書XXIII

姫御前遺跡 III

2013

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸新幹線関係発掘調査報告書ⅩⅩⅢ

姫御前遺跡Ⅲ

2013

新潟県教育委員会

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北陸新幹線は、東京を起点に上越新幹線高崎駅から分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市を経て大阪府に至る総延長700kmの新幹線鉄道です。開通により北陸地方と首都圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に先立ち、平成24年度に実施した姫御前遺跡の発掘調査報告書です。調査によって、弥生時代から古墳時代と室町時代の遺跡であることが明らかになりました。古墳時代には、集落が営まれていたことが分かり、隣接する竹花遺跡で検出された水田と合わせて、当時の景観を知る上で貴重な情報となりました。また、室町時代には周辺に水田が広がっており、そこで木製品を使った祭祀が行われていたことも明らかになりました。香や茶に関する道具などの高級品も多数発見され、付近に有力者が存在したことをうかがい知ることができます。

今回の調査資料と本報告書が、糸魚川地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助をいただいた糸魚川市教育委員会、並びに地元住民の方々、また、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮をいただいた独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構北陸新幹線第二建設局、同糸魚川鉄道建設所の皆様にお礼を申し上げます。

平成25年3月

新潟県教育委員会

教育長 高井 盛雄

例 言

- 1 本書は、新潟県糸魚川市東寺町二丁目 1069 番地 1 ほかにある新御前遺跡の発掘調査記録である。なお、2006・2008 年度に調査し、『新御前遺跡 1』及び『新御前遺跡 II・竹花遺跡 1』として報告書を刊行している。したがって、本書を『新御前遺跡 III』とする。
- 2 この調査は、北陸新幹線の建設に伴い、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 3 埋文事業団は、掘削作業等を株式会社ノガミに委託して、2012 年度に発掘調査を実施した。
- 4 出土遺物及び調査に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は新御前遺跡の略記号を「12 ヒメゴ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。
- 6 本文の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 遺物番号は種別に問わず通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 図版中のトーンは、各図版に凡例を示した。また、断面スミ建りの土器実測図は須臾器を表す。
- 9 引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に [] 示し、巻末に一括して掲載した。また、作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 10 自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所に委託して行った。
- 11 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集は株式会社ノガミに委託してデジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 12 本書の執筆は、加藤 学（埋文事業団 班長）、石垣義則（株式会社ノガミ 調査員）が当たり、編集は加藤が担当した。執筆分担は以下のとおりである。
第 1 章、第 2 章 1、第 4 章 3 D、第 5 章 3、第 7 章：加藤
第 2 章 2、第 3 章、第 4 章 1・2・3 A～C、第 5 章 1・2・4・5：石垣
第 6 章：株式会社加速器分析研究所

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 試掘・確認調査の結果	2
A 調査の体制	2
B 調査の結果と取扱い	2
3 本発掘調査と整理作業の経過	3
A 調査・整理の体制	3
B 調査の経過	3
C 整理作業の経過	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	7
第Ⅲ章 調査の概要	12
1 グリッドと調査区の設定	12
2 基本層序	12
3 調査の概要	13
第Ⅳ章 遺 構	14
1 概 要	14
2 中世の遺構	14
3 古墳時代前期の遺構	14
A 土 坑	14
B 柱 穴	14
C 倒 木 痕	15
D 樹 根	15
第Ⅴ章 遺 物	16
1 概 要	16
2 土器・陶磁器	16
A 中世～近世の土器・陶磁器	16
1) 椀 類	17
2) 皿 類	17
3) 水注・盥・鉢・瓦器	18
4) 甕 類	18
5) 壺 類	19
6) 片口鉢・楕鉢類	19
7) 加工円盤	19
8) 土 鍾	19

B	古代の土器	20
C	弥生時代～古墳時代の土器	20
	1) 土器の分類	20
	2) 各 説	20
3	石器・石製品	21
4	金属製品・鍛冶関連遺物	21
5	木 製 品	22
第VI章 自然科学分析		23
1	姫御前遺跡出土木材の樹種	23
A	はじめに	23
B	試 料	23
C	分 析 方 法	23
D	結 果	23
E	考 察	24
2	姫御前遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	24
A	測定対象試料	24
B	測定の意義	24
C	化学処理工程	24
D	測定方法	25
E	算出方法	25
F	測定結果	26
第VII章 ま と め		27
1	旧地形の復元	27
2	弥生時代後期	28
3	弥生時代終末期～古墳時代前期	29
4	古墳時代中期初頭	29
5	古墳時代中期・後期	30
6	古 代	30
7	中 世	30
	《要 約》	32
	《引用・参考文献》	33

《観 察 表》	35
遺構観察表	土坑・ピット	35
遺物観察表	中近世土器・陶磁器（1）	35
遺物観察表	中近世土器・陶磁器（2）	36
遺物観察表	弥生時代～古墳時代土器	37
遺物観察表	石器・石製品、鍛冶関連遺物	37
遺物観察表	鉄 貨	37
遺物観察表	木 製 品	37

挿 図 目 次

第1図	北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置	1	第6図	観不知海岸	6
第2図	確認調査トレンチ位置と本発掘調査対象範囲	4	第7図	位置と周辺の地形	7
第3図	糸魚川・静岡構造線	5	第8図	周辺の主な遺跡	8
第4図	青海川の硬玉産地	5	第9図	鉄滓・羽口出土分布図	22
第5図	小滝川の硬玉産地	5	第10図	木材の顕微鏡写真	23
			第11図	暦年較正年代グラフ	26

挿 表 目 次

第1表	中近世土器・陶磁器の産地・器種別破片数	17	第6表	樹種同定結果	23
第2表	中世土師質土器皿の分類	18	第7表	測定結果（補正值）	26
第3表	加工円盤の分類	19	第8表	測定結果（非補正值）	26
第4表	総御前遺跡・竹花遺跡出土の加工円盤集計表	19	第9表	弥生時代～古墳時代の編年と実年代	28
第5表	各遺跡における出土鉄貨数集計表	21	第10表	中近世土器・陶磁器の産地・器種別破片数	31

図 版 目 次

【図画図版】

図版1	全体図
図版2	2012年度調査区 全体図
図版3	遺構分割図
図版4	遺構個別図
図版5	中近世の土器・陶磁器（1）
図版6	中近世の土器・陶磁器（2）、弥生時代から古墳時代の土器
図版7	石器・石製品、鉄貨、鍛冶関連遺物、木製品

【写真図版】

図版8	遺跡近景、7区全景
図版9	遺跡近景、7・8区全景、SX826・SX827 検出状況、基本層序②
図版10	SX825、P806、P811、SK819、箸状木製品・鉄貨出土状況
図版11	中近世の土器・陶磁器（1）
図版12	中近世の土器・陶磁器（2）、弥生時代から古墳時代の土器
図版13	石器・石製品、鉄貨、鍛冶関連遺物、木製品

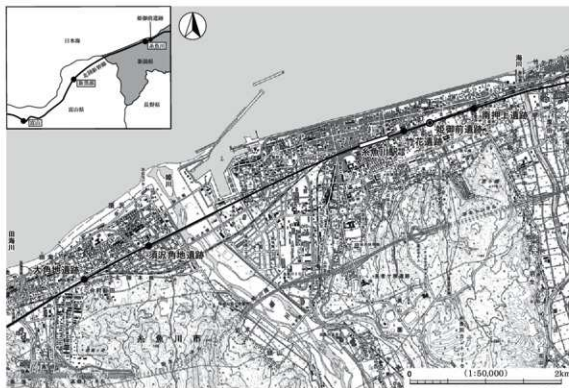
第I章 序 説

1 調査に至る経緯

北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道である。東京駅を起点とし、上越新幹線高崎駅で分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市等の主要都市を經由し、新大阪に至る延長約700km（うち東京-高崎間105kmは上越新幹線と共用）の路線である。このうち、高崎-長野間は、1997年10月から営業運転している。北陸新幹線の全通により、北陸地方と首都圏・関西圏を短時間で結び、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展にも多大な効果をもたらすものと期待されている。

上越市から富山市までの約110kmの区間は、1993年9月に糸魚川市～魚津市間が新幹線鉄道規格路線としての工事実施計画が認可され、2001年4月には上越～糸魚川間の新規着工及びフル規格化が決定した。これを受けて、鉄道・運輸機構と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査、試掘・確認調査等に関する協議が本格化した。

2001年5月、鉄道・運輸機構から分布調査の依頼を受けた県教委は、同年10月に分布調査を実施した。その結果、周知の姫御前遺跡で土師器片を採集したこと等から、周辺地域の試掘・確認調査が必要である旨を報告した。これを受けて2005～2007年度に試掘・確認調査を行い、姫御前遺跡6,720㎡について



【国土地理院「糸魚川」(観尾敷)(平成14年発行)1:25,000縮図】

第1図 北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置

2 試掘・確認調査の結果

て本発掘調査が必要と判断し、2006・2008年度に本発掘調査を完了した。

その後、2012年2月、姫御前遺跡5区隣接地で寺町融雪基地建設が行われることが鉄道・運輸機構から伝達され、本発掘調査を行う必要性について照会があった。それまでに行った調査の結果を踏まえれば、ここには遺構・遺物が残存していると考えられ、融雪基地建設に伴い本発掘調査が必要であると2012年2月20日の協議で回答した。

これを受け鉄道・運輸機構は県教委に本発掘調査を依頼し（2012年3月8日付け鉄道北・二用一第120206001号）、調査体制である県教委は埋文事業団に依頼した（2012年3月22日付け教文第1408号の2）。

2 試掘・確認調査の結果

A 調査の体制

【2005年度】

調査期間	2005（平成17）年5月10日～5月12日、11月16日～11月29日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	波多 俊二	（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）	
管理	長谷川二三夫	（同 総務課長）	
庶務	長谷川 靖	（同 班長）	
調査総括	藤巻 正信	（同 調査課長）	
調査担当	寺崎 裕助	（同 担当課長代理）	
調査職員	尾崎 高宏	（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係 主任調査員）	
	田中 一穂	（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 嘱託員）	

【2006・2007年度】

調査期間	2006（平成18）年7月21日、2007（平成19）年9月26日～10月12日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	波多 俊二	（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）	2006年度
	木村 正昭	（同 事務局長）	2007年度
管理	斎藤 栄	（同 総務課長）	
庶務	長谷川 靖	（同 班長）	
調査総括	藤巻 正信	（同 調査課長）	
調査担当	田海 義正	（同 担当課長代理）	
調査職員	田中 一穂	（同 嘱託員）	

B 調査の結果と取扱い

試掘・確認調査は、上記のとおり3か年にわたって実施した。調査対象地に任意に試掘坑を設定し、重機（バックホー）及び人力による掘削・精査を行って、遺構・遺物の有無を確認した。その後、トレン

チ位置、土層の堆積状況等を図面・写真に記録した。調査の結果、古墳時代の遺物包含層が、第2図17-⑧T～19-4Tまでの間に存在することを確認した。そして、3か年の試掘・確認調査によって、総延長425mにわたる6,720㎡について本発掘調査が必要と報告した。なお、これまでに本発掘調査を行った面積は、施工方法との照合等から若干の増減があり、合計で6,800㎡（姫御前Ⅰ:3,120㎡、姫御前Ⅱ:3,680㎡）である。今回は、姫御前遺跡5区の北側に隣接する227㎡を対象として調査を実施した。

3 本発掘調査と整理事業の経過

A 調査・整理の体制

調査期間	2012（平成24）年7月2日～8月24日		
整理期間	2012（平成24）年7月9日～2013（平成25）年1月31日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 高井 盛雄）		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	木村 正昭	（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）	
管理	熊倉 宏二	（同 総務課長）	
庶務	伊藤 忍	（同 班長）	
調査総括	北村 亮	（同 調査課長）	
指導	田海 義正	（同 担当課長代理）	
調査担当	加藤 学	（同 班長）	
支援	株式会社ノガミ		
	現場代理人	伊藤正紀	
	調査員	石垣義剛	
	調査員補	佐藤 俊	
	補助員	武田裕紀子	

B 調査の経過

施工を急ぐことから、調査を早急に実施してほしい旨の要望があったため、2012年度当初から発掘調査に着手できる体制を整えた。しかし、土留工事の遅れに伴い、調査着手は7月初旬となった。当年度の本発掘調査対象範囲は、土留めで囲われた調査区・7区と、土留めなしの調査区・8区がある（図版2）。調査の工程上、7区の調査を完了させたのち、8区を調査した。

調査は7月2日から開始した。7区の表土掘削を7月2日・3日に行い、4日から作業員を本格的に投入した。遺物包含層の掘削を開始したところ、地山までの深さが浅いところは10cm、深いところでは50cm以上あり、起伏に富んだ地形を検出した。遺構の分布は希薄であったが、遺物包含層中に遺物がまんべんなく存在したため、上位から順に掘削した。8月上旬には完掘し、8月8日に全体写真の撮影及び測量を行い、夏季休暇に入った。夏季休暇明けに8区の調査に着手した。土留めを行っていないため、湧水が著しく、機械と人力を併用して遺物包含層を掘削した。遺構は検出されず、写真撮影・測量を行い8月24日で調査が完了した。

8月23日に鉄道運輸機構と現地の引き渡し協議を行ったところ、土留めを行っていない調査区は、降

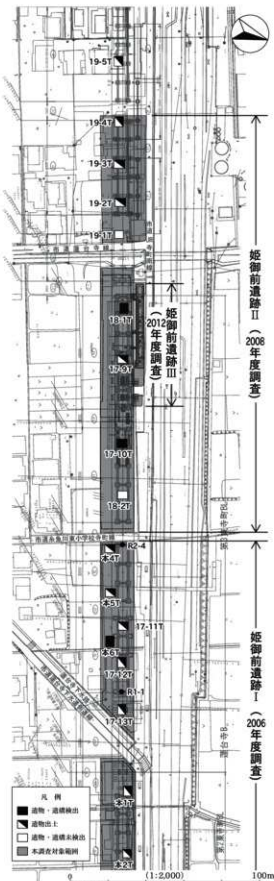
3 本発掘調査と整理作業の経過

雨によって水没するため、埋め戻すよう要望があった。そこで急遽、準備を行い、8月27日・28日に埋め戻し作業を行い、現地作業を完了した。

なお、2008年度調査区と2012年度調査区の間には、幅2～2.5mの未調査範囲が発生してしまった。両者は、本来、一体的に調査すべき事業であるが、分割した結果、このような事態を招いてしまった。今後は開発事業の内容を正確に把握し、できる限り分割せずに一体的に調査できるよう、事前協議の段階から綿密に打ち合わせる必要がある。一体的に調査することで、より充実した調査成果を得られ、調査期間・費用の縮減においても益するところが大い。

C 整理作業の経過

土留工事の遅れにより調査に着手できなかった4月～6月の間に前文の執筆等を行い、準備作業を進めた。調査着手後は、調査と併行して整理作業を行った。遺構の記録類については、現地で基礎整理を進めた。遺物は、株式会社ノガミ亀田整理室に順次運搬し、水洗・乾燥・注記・選別・実測・トレスを行った。なお、編集業務と印刷・製本業務を株式会社ノガミに委託することとした。2013年1月中旬に図版類と原稿を完成させ、編集業務担当に素材を提供した。また、放射性炭素年代測定を加速器分析研究所に委託した。12月28日が納期であったため、この部分の編集業務と、その結果を受けたまとの原稿執筆を1月に行った。2013年1月～2月に編集・校正を行い、2月に起案、決裁した。その後、再度、校正を行い、2013年3月に印刷・刊行した。



第2図 確認調査トレンチ位置と本発掘調査対象範囲

第二章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

姫御前遺跡が所在する糸魚川市は、新潟県の最西端に位置する。地域の北は日本海に面し、南は長野県、西は富山県と接する。糸魚川は国史跡・松本街道の基点として知られている。「塩の道」と呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までのおよそ30里（120km）に及ぶ峻険な山越えの道であり、海をもたない内陸部へ塩や魚介類を送る生命線として重要な役割を担ってきた。現在も姫川沿いに長野県に通じる一般国道148号・JR大糸線と、海岸線沿いの北陸自動車道・一般国道8号・JR北陸本線の交点に当たる交通の要所となっている。

糸魚川市には、南北に流れる姫川とほぼ一致するように、フォッサマグナの西縁に当たる「糸魚川-静岡構造線」が分布する（第3図）。この構造線を境界に、地質学的に西日本と東日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀～ペルム紀に至る青海-蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩から成り立っている。青海-蓮華変成岩帯は、その断層面に蛇紋岩・輝緑岩・変はんれい岩などが介在する複雑な構造をなしており、ひすい輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。中でも、ひすい輝石岩は小滝川や青海川で産出されることが知られており、「小滝川の硬玉産地」「青海川の硬玉産地」が国の天然記念物に指定されている（第4・5図）。一方、この構造線以东の地層は主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩から成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なる。このこ



第3図 糸魚川・静岡構造線



第4図 青海川の硬玉産地



第5図 小滝川の硬玉産地

1 地理的環境

とが、地形・動植物の分布に相違を生み、さらには言語・民俗文化にも影響を与えることとなったと言われている。

市域の南側には、飛騨山脈と西頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山(2,768m)をはじめとして2,000m級の山々が連なる。その主稜は日本海に進むにしたがって高度を急速に減じ、日本海に没している。この急崖が親不知海岸であり、東西文化の障壁となった(第6図)。石灰岩からなる黒姫山(1,221m)・明星山(1,188m)では山岳カルストが発達しており、



第6図 親不知海岸

日本最深の白蓮洞(513m)など多数の洞穴が存在する。市域には、ここから産出する石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成されている。

西頸城山地は、新第三紀以降の堆積層が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨降山(1,963m)や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、その背後には本県唯一の活火山である桃山(2,400m)がある。標高400m以下の小起伏山地は、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水量が増大する融雪期、梅雨期、初冬などには、崩落・地滑りが発生する〔鈴木2000〕。地滑り等防止法制定の契機となった権口地滑り(1947年発生)など、地滑り地が多い地域である。

これらの山地を源流にして、青海川・田海川・姫川・海川・早川などが北流し日本海に注ぐ。中でも姫川はこの地方最長の一級河川であり、全長約60kmに及ぶ。河川沿いには河岸段丘が見られるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで6段に細分されている〔鈴木1983〕。高位の段丘には縄文時代～弥生時代、低位の段丘には縄文時代～古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下るにしたがって高位から低位へとその分布する主体面を移動させていると理解されていた〔寺崎1988〕。しかし、北陸新幹線・国道8号糸魚川東バイパスの建設に伴い発掘調査されている海川右岸の六反田南遺跡では、地表下約2m、標高約3.5mの沖積地で縄文時代中期の集落も検出した〔山本_他2012〕。この発見により、土地利用のあり方を大きく見直す必要が生じた。

河川はいずれも急流で、かつ海底が深いこともあり、沖積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心に狭い海岸平野が広がる。このほかの平地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東～南西に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口の左岸の須沢では最大幅300m、最大高11.5mを測る〔鈴木1983〕。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平地に立地している。

姫御前遺跡は、この限られた平地に位置し、地形区分上は砂丘列と丘陵に挟まれた沖積地(三角州)に当たる。北側に広がる海岸砂丘上には加賀街道が通り、その両側に近世集落が築かれている。当遺跡周辺は、この集落よりも1mほど標高が低く、古墳時代中期～後期以降、水田として利用されてきた範囲に相当する〔加藤2012〕。

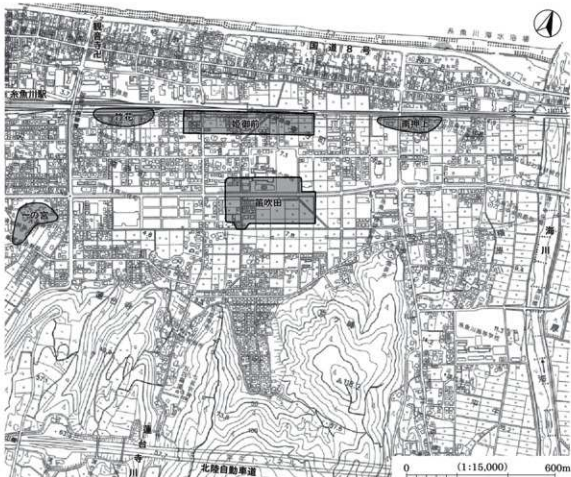
2 歴史的環境

糸魚川市域における古墳時代から中世の主な遺跡の分布は、第7・8図のとおりである。姫川右岸の糸魚川地区では標高100m以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高50m前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。近年の北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって、狭い平野部に遺跡が濃密に分布することが明らかとなった。ここでは、姫御前遺跡に関連する古墳時代から中世の遺跡について概観する。糸魚川市周辺の弥生時代から中世の遺跡の存続期間については、[春日2008]を参考にした。

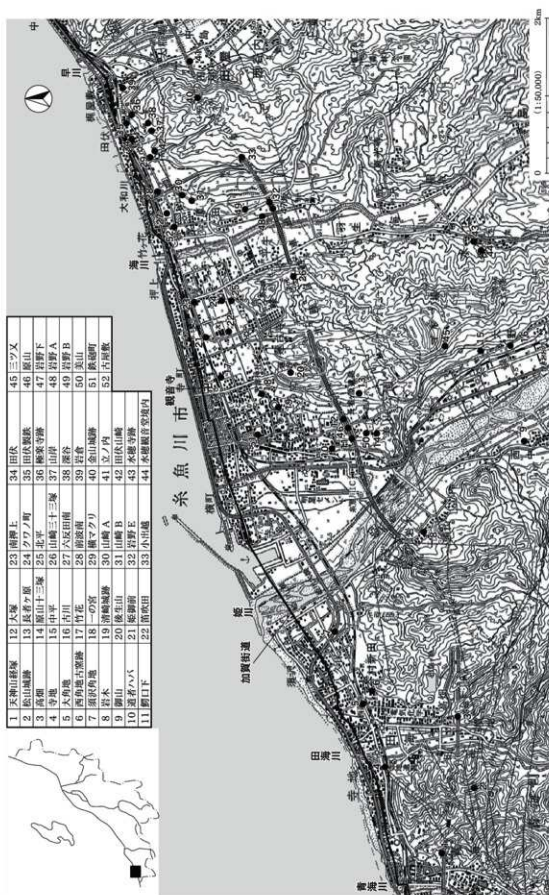
古墳時代

古墳時代の遺跡は、石材原産地を背景に玉作に関連する遺跡が多数存在する。青海地区の^{カサカサ}大角地遺跡(5)をはじめ、糸魚川地区では笛吹田遺跡(22)、南押上遺跡(23)が代表的である。これらを含めた新潟県内の玉作遺跡については、寺村光晴氏・関雅之氏が詳細にまとめている[寺村1986、関2004]。

大角地遺跡(5)は、1935(昭和10)年8月9日の東京朝日新聞(現、朝日新聞)新潟版に「石器時代の玉作り遺跡か」と紹介されている[日本考古学会1935]。その後、青木重孝氏によって蓄積された資料が契機となり学会で注目され、勾玉の製作過程「オガクシ技法」[寺村1966]の標識遺跡として知ら



第7図 位置と周辺の地形 (「糸魚川市都市計画図1:10,000」をもとに作成)



第9図 街道の主な道路跡（加賀街道の位置は〔土田1991〕による。）〔国土地理院「糸魚川」（平成8年発行）、「小嶋」（平成15年発行）1:50,000縮刷〕

れる。1970・73（昭和45・48）年には発掘調査が行われ、工作用特殊ビットをもつ玉作工房が検出され、前期から中期の滑石製玉類の製作関連資料が多数出土した〔寺村₂₀1979〕。

笛吹田遺跡（22）は前期を中心とする滑石製玉類を製作した玉作遺跡で、白玉・勾玉・管玉等が出土し、玉作用特殊ビットが検出されている〔寺村₂₀1978〕。その後の発掘調査では、琴柱形石製品（紋絞岩製）の一種である工字状石製品も出土している〔山岸2010〕。なお、笛吹田遺跡は、1962（昭和37）年時点では「姫御前遺跡」として登録されており、1975（昭和50）年に別個の遺跡とされるまでは、同一の遺跡として捉えられてきた経過がある〔土田1978〕。両遺跡の間に遺跡の空白が存在するとされるが、年代的に重複することから無関係とは言えない。

南押上遺跡（23）では前期中葉から後葉の玉作遺跡が検出された。大量の玉作関連遺物が出土し、特に前期後葉の重玉の成品・未成品の発見は、全国的にも類例が少なく貴重な調査事例である〔小池₂₀2011〕。

一の宮遺跡（18）は、1919（大正8）年に東京帝室博物館の高橋健自氏によって発掘調査され、前期の土器とともに有孔円盤・勾玉・白玉等が出土しており〔糸魚川市役所1986〕、玉類は大角地遺跡・笛吹田遺跡・田伏遺跡等の玉作遺跡との関連が指摘されている〔関1972〕。

田伏遺跡（34）は、1970（昭和45）年に発掘調査が行われ、滑石製の白玉・管玉・勾玉・子持勾玉・紡錘車の製作関連資料が多数出土した〔関1972〕。出土した土器は前期中葉から後期（5世紀後半～6世紀後半）に比定される。

玉作関連遺跡は沖積地や丘陵裾部に限らず、海岸部から約3.3km内陸の河岸段丘上に立地する三ツ又遺跡（45）等でも見つかっている〔糸魚川市役所1986〕。その他に、当遺跡、横マクリ遺跡（前期）（29）、六反田南遺跡（27）においても小規模な玉作が確認されている。なお、現時点において、糸魚川市域で古墳は確認されていない。

また、糸魚川市域では弥生時代後期から水田稲作を中心とする農耕社会が構築されており、その一端は当遺跡や竹花遺跡（17）で水田を検出したことからもうかがえる〔加藤₂₀2011a, 相羽₂₀2011〕。特に、2008（平成20）年の発掘調査では、畦畔が沈下しないよう板材を敷き詰める例や畦畔中から多数の木製品が出土する例が認められ、古墳時代の水田稲作技術や農耕に関連する祭祀を解明する上で注目される〔加藤₂₀2011a〕。

古 代

越後国の成立については、〔米沢1980・山田1986〕が詳しい。越国に政府の蝦夷対策として、647（大化3）年に淳足橿、648（大化4）年に磐舟橿が設置されたことが、『日本書紀』に記されている。7世紀末頃、それまで越国とされていた地域が細分され、越前国・越中国・越後国・伊豫国が成立したと見られる。702（大宝2）年に越中国4郡（薩原郡・古志郡・魚沼郡・頸城郡）が越後国に移管され、708（和銅元）年には越後国に出羽郡が成立する。712（和銅5）年に出羽郡が越後国から分離、独立して出羽国が成立した。後に出羽国には陸奥国最上・置賜両郡が編入されることとなる。8世紀前葉には越後国の領域がほぼ確定し、現在の新潟県の原形ができあがる。『和名類聚抄』には頸城郡の郷名（沼川・郡有・栗原・荒木・板倉・高津・物部・五十公・夷守・佐味）が記載され、そのうち糸魚川市は頸城郡沼川郷に属する。沼川郷の郷域は、上越市直江津より越中国に至るまでの海岸地域をさし、『大日本地名辞書』〔吉田1907〕には糸魚川市青海市振から糸魚川市早川谷までの地域とある。なお、当時の越後国府の場所は明らかではないが、『和名類

2 歴史的環境

聚抄」には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

古代では中央と地方を結ぶ交通制度として、官道（駅路）に沿って約16kmごとに馬家を設ける駅制が整備された。越後国の駅制については、米沢康氏・木村宗文氏がまとめている〔米沢 1976・木村 1986a〕。『延喜兵部省式』に「越後国駅馬 滄海8疋、彌石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各5疋、伊神2疋、渡戸舟2艘伝馬 頸城・古志郡各8疋」と記されている。駅馬とは駅鈴と持つ公用の役人（駅使）が乗用する馬で、伝馬とは公用旅行者（伝使）が乗用する馬である。滄海駅は糸魚川市青海地区に比定され、滄海駅が他の駅よりも多い8疋の駅馬をかかえていたのは、親不知・子不知の難所をひかえていたと考えられる。また、海路も重要な交通路として利用されていたと考えられ、鯉口下遺跡（11）で小泊産須恵器が出土することからもうかがえる〔鈴木・高橋₂₀₀₉、1989、坂井 1996〕。なお、『延喜式神名帳』に記載されている頸城郡の神社は13社あり、そのうち奴奈川神社は沼川の郷名と一致し、現在の天津神社境内の奴奈川神社に比定される〔木村 1986b〕。

青海地区（旧青海町域）は古代滄海駅の推定地である。須沢角地遺跡（7）は、1987（昭和62）年、2007（平成19）年の発掘調査によって、7世紀末～9世紀前半の集落であることが明らかとなった〔土田₂₀₀₉、1988、今村・山岸 2008〕。埋文事業団も4か年にわたる発掘調査を行い、竪穴建物6棟、掘立柱建物8棟、畑作溝4か所などを検出したが、滄海駅が存在を積極的に支持する資料は得られていない。遺物は、8世紀後半～9世紀前半のものが大半で、須恵器のなかには焼歪みや顕著なものや溶着のものが見られた。それらは西方500mに位置する西角地古窯跡（6）との積極的な関係がうかがえる〔加藤_{2011b}、2011b〕。西角地古窯跡は、窯体や灰原が削平により不明であるが、整理箱10箱分の須恵器が出土している〔千家・山本 1979〕。窯跡の時期は、8世紀末～9世紀初頭前後と考えられている〔春日 1998〕。

糸魚川地区（旧糸魚川市域）では、これまでに丘陵部で多くの遺跡が発掘調査されており、主な遺跡として、道者ハバ遺跡（10）・原山遺跡（46）・大塚遺跡（12）・山崎A遺跡（30）・岩野下遺跡（47）・小出越遺跡（33）・山岸遺跡（37）がある。山崎A遺跡では平安時代の竪穴建物25軒、掘立柱建物29棟が検出され、中には床面積が150㎡を超える大型の掘立柱建物も2棟含まれる。さらに、饗宴に伴う大量の土師器を廃棄した土坑も見つかっている〔木島 2010〕。小出越遺跡からは8世紀末～9世紀の土師器焼成遺構が検出された〔鈴木₂₀₀₉、1988〕。また、山岸遺跡では建物跡は未検出だが、9世紀後半から10世紀の土坑・溝・畑作溝・水田・河道が検出され、製塩土器や漁撈・紡績に関する遺物が出土した〔春日₂₀₁₀、2012〕。

近年では沖積地においても、鉄砲町遺跡（51）・六反田南遺跡（27）・前波南遺跡（28）・田伏山崎遺跡（42）などで古代の遺構・遺物が見つかっている。前波南遺跡では、古代の溝から大足の横木、棒状木製品のほかに、「出雲真山」と書かれた木簡が出土している。「出雲」の文字が含む木簡は、当時の出雲（島根県）や郡（京都府）以外で出土することは稀で、糸魚川と出雲の密接な関係を示す資料として注目される〔石川₂₀₁₀、2010〕。田伏山崎遺跡では、古代の自然流路から墨書土器や斎串が、川岸からは八稜鏡や腰帯石鏡が出土し、祭祀行為がうかがわれる。また、大量の製塩土器が出土しているが、製塩関連の遺構は未検出である〔佐藤₂₀₀₉、2009〕。

中 世

中世に入ると、これまでの政治や経済活動に大きな変化が見られる。そのひとつは土地支配で、古代律令における国や郡を単位とするものから、荘園や国衙領（保・郷など）からなる荘園公領制へと変わる。越後国の荘園と国衙領については、萩野正博氏が詳細に論じている〔萩野 1986〕。頸城郡には佐味荘以

外に荘園がなく、国衙領が支配する。糸魚川市域は沼川保に属しており、律令制下の沼川郷域に成立したことから、郷名がそのまま保名になったと考えられる。史料上の初出は、糸魚川市天津神社懸弘の1449(文安6)年6月20日付けの裏板墨書書に、「越後国沼川保一宮天津社」とある。

青海地区では、沖積地に位置する遺跡が少なく、丘陵部に山城や経塚が存在する。寺地遺跡(4)では、室町時代から江戸時代の掘立柱建物1棟が検出され、祭祀をうかがわせる多くの木製品が出土している〔相羽ほか2002〕。須沢角地遺跡(7)では中世の水田跡が検出され、また別の調査区からは箸状木製品・人形など祭祀に関係する遺物が出土している〔加藤₂₀₀₈2011b〕。松山の尾根上に南北500mにわたって築城された松山城跡(2)は、標高170mの地点に本丸跡があり、空堀や帯曲輪・裾曲輪で幾重にも固められている〔平野・渡辺1986〕。天神山経塚(1)は、1919(大正8)年に調査され、1167(仁安2)年の銘のある珠洲焼の経筒が見つかった〔金子1975〕。

糸魚川地区では、段丘から丘陵裾部に水穂観音堂境内遺跡(44)、山崎A遺跡(30)、立ノ内遺跡(41)などがあり、特に山岸遺跡(37)の発掘調査成果が注目される。12～14世紀の集落跡が見つかり、12世紀後半の集落跡では、平面積100㎡を超える大型の掘立柱建物¹が検出された。また、農業・漁撈・紡績・木工などの生業に関する遺物も多数出土し、豊かな集落であったと考えられている。平面積180～200㎡の掘立柱建物(13世紀中葉から後半)や庭園をもつ100～190㎡の掘立柱建物(13世紀末～14世紀初頭)も検出されている。さらに傘紋入り長柄の鏡子²が出土したことも含め、北条一門の名越氏に関連する屋敷地の可能性が高いと考えられている〔春日₂₀₁₂2012〕。

当地域における中世の集落は、北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって、沖積部に多数存在することが明らかとなった。竹花遺跡(17)、六反田南遺跡(27)、前波南遺跡(28)で中世の遺構・遺物が見つかった。竹花遺跡は水田のみの検出であったが、多数の陶磁器類や人形・動物形・刀形・舟形等の祭祀に関する木製品も出土している。陶磁器の質の高さ、量・種類の多さは県内有数の内容で、茶の湯や香を嗜むことのできる財力のある階層が近隣に存在したことがうかがえる〔加藤₂₀₀₈2011a〕。

また、中世の遺物で注目されるのは、多数の木製品が出土したことである。寺地遺跡(4)、山岸遺跡(37)、竹花遺跡(17)の発掘調査事例によって明らかになり、当遺跡からも同様に木製品が出土している〔加藤₂₀₀₈2008、加藤_{2011a}2011a〕。特に、箸状・棒状の製品が地面に突き立てられた状態で検出されている。この特異な出土状況の解釈については多角的な検討を要するが、特徴的な祭祀が行われたことをうかがい知ることができる。

第三章 調査の概要

1 グリッドと調査区の設定

2012年度調査区は、2008年度調査区(5区)の北側に隣接する。調査区は、矢板で囲まれた調査区を7区、土留めなしの調査区を8区と呼ぶこととした。

グリッドは2006・2008年度調査区と連続して設定することで、相互の位置関係を把握できるようにした。グリッドの主軸は、新幹線法線のセンター杭 R2-4 (世界測地系 X=115906.5398, Y=-55596.2477, 17B グリッド北西隅)と R1-1 (世界測地系 X=115931.7057, Y=-55523.6880, 10B グリッド北側ライン上)を結んだラインとし、杭 R2-4 を基点とした(図版1)。主軸は真北から70度52分19秒東偏する。なお、2012年度調査区のうち30A グリッド北西隅の座標は X=115873.3891, Y=-55722.3470、28A グリッドの北西隅の座標は X=115879.9482, Y=-55703.451 である。

グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割したものである。大グリッドの呼称は、センター杭の方向を算用数字、それと直交する方向をアルファベットとし、両者の組み合わせにより表示した。なお、当初計画になかったA列の北側に調査区が延びたため、Z列を新たに設定した。小グリッドは1～25の算用数字で表し、北隅を1、東隅を5、西隅を21、南隅を25となるように付した。これを組み合わせて「30A1」等と表した。

2 基本層序(図版2)

2012年度調査では、2008年度調査で付した層位との整合性を図ることに努めた。その結果、基本層序は2008年度調査と一致した。ただし、今回の調査では、旧地形の凹凸を検出することができ、低地部分でII b層を2枚に分層できた。旧地形は31列が高く、31・30列の境界付近で急激に落ち込み、ここから東側では平坦となる。なお、最も高い30列付近と、最も低い29列付近では30cmの高低差がある。

0層 盛土 宅地造成時の盛土

I層 旧表土 近代以降の出土品を含む。II a層との層界面には鉄分が著しく沈着しており、水田の床土であったと考えられる。

II a層 暗黄灰色細砂(2.5YR5/2) 粒子がやや粗い細砂を基調とし、直径5mmほどの礫をまばらに含むことから、洪水性の堆積物と考えられる。花粉分析・植物珪酸体分析の結果からは、II a層段階において水田稲作が行われていたことが明らかであり、水の影響を受けやすい環境にあったことがうかがえる。II a層には17世紀前半を主体とし、18世紀前半までの遺物が含まれており、近世に堆積した土層と考えられる。層厚は4～8cmほどで、調査区西側の標高が高い部分には残存しない。

II b層 黒褐色細砂混じりシルト(10YR3/2) シルトを基調とし、砂を介在することから湿地性の堆積物と考えられる。花粉分析・植物珪酸体分析の結果からは、II b層段階においても水田稲作が行われていたことが明らかとなっており、水の影響を受けやすい環境にあったことがうかがえる。15～16世

紀の遺物を多数含むことから、主に中世後期に堆積した土層と考えられる。なお、最下位からは古代（9世紀）の遺物がわずかに出土しており、Ⅱb層の堆積開始年代を反映すると考えられる。また、一部でⅡb層を上下に二分することができた。上部はより砂質で、下部はより粘質である。層厚は10～30cmほどである。

Ⅲ層 褐灰色粘質シルト（10YR4/1） Ⅱb層に比べてやや粘性が強い。直径10mm以下の炭化物をわずかに含む。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層である。Ⅲ層は低地部分ほど厚く堆積しており、層厚は8～20cmほどである。

Ⅳ層 灰色砂質シルト（10YR2/1） 漸移層。Ⅳ層を基調とするものの、黒褐色粘質シルトを斑状に、炭化物粒子をごくわずかに含む。層厚は8cmほどで、低地部分のみで認められた。

Ⅴ層 灰色砂質シルト（5Y4/1） 調査において地山と判断した土層であり、上面が遺構検出面である。均質な砂質シルトで、混入物は認められない。

3 調査の概要

前節で触れたとおり、Ⅱa層（近世）、Ⅱb層（中世後期）、Ⅲ層（弥生時代後期～古墳時代前期）の3枚の遺物包含層を層位的に調査した。

Ⅱb層では14世紀後半～16世紀の陶磁器類とともに、箸状木製品が地面に突き刺したような状態で検出したが、建物等の遺構は検出できなかった。

Ⅲ層では古墳時代前期を中心とする土器と石器が出土した。土器はほとんどが細片であり、全体を復元できる資料は存在しない。また、遺構の分布は極めて希薄であり、土坑1基、ピット（柱穴）4基のみであった。このほかに、ピット状の落ち込みを多数検出したが、樹根等により形成された落ち込みと判断した。ただし、表面上は遺構との区別ができないため、遺構と同様に調査して記録を残すこととした。

なお、遺構調査の方針・記載は『新潟県埋蔵文化財調査報告書第207集 磐前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ』〔加藤^{2011a}〕、土層及び土器・陶磁器の色調記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』（2003年度版）に準じることとした。

第IV章 遺 構

1 概 要

遺構名は、遺構種別の略号と通し番号を組み合わせて表記した。遺構番号の略号は、ピット＝P、土坑＝SK、性格不明遺構＝SXとした。SXとしたものは、倒木痕、樹根等である。また、2012年度調査においては、遺構番号を800番から付した。検出した遺構は、中世と古墳時代前期の2時期ある。

中世は、祭祀を想定させる箸状木製品を地面に突き立てたものを1基検出した。このような遺構は2006年度・2008年度調査でも多数検出した。

古墳時代前期は当遺跡の中心時期であり、遺物量は定量あるものの遺構数が希薄であった。ピットは17基検出したが、そのうち柱穴と推定できたものは4基のみであった。そのほかのピットは、平面・断面形状、埋土の特徴から樹根痕である可能性が高いと判断した。また、溝状遺構として検出した遺構についても、ピット同様に不整形な形状、覆土の特徴から樹根痕と判断した。人為的に掘り込まれたと判断した遺構は、ピット4基と土坑1基である。遺構の形状や規模等は観察表に記載した。

2 中世の遺構 (図版3・4・10)

SX800は箸状木製品(報告番号88)が地面に突き刺さった状態で検出した。II b層上部を貫いているが、II b層下部の上面では箸が折れ曲がっていた。SX800のほかは、II b層中からは箸状木製品6点が出土したが、地面に突き刺さった状態のものはSX800のみであった。

3 古墳時代前期の遺構

A 土 坑

SK819 (図版3・4・10)

開渠で壊れているが、平面形態は方形または長方形を呈するとみられる。長軸は残存値で50cm、短軸は78cmである。深さは43cmで断面形態は台形状を呈する。覆土は4層に層別した。主に地山土で埋め戻されている。1層から土師器の細片が2点出土した。

B 柱 穴 (図版3・4・10)

掘形がしっかりしており、比較的深く掘られているピットを柱穴として報告する。P806・P811・P821・P824である。これらの柱穴は、調査区西側の標高が比較的高い場所検出した。覆土の色調が褐灰色や黒褐色であるため、地山との色調の差が明瞭で検出作業は容易であった。覆土はIII層を基調としたシルトで、炭化物がまばらに混入する。南側に隣接する2008年度調査区(5区)で検出したピットと合わせて、柱筋を確認したが、掘立柱建物を組むことはできなかった。出土物については、P811から土師器の細片が1点出土したのみで、そのほかのピットからは遺物は出土しなかった。

C 倒木痕 (図版2・3・4・10)

29Z5、29A1・2・6・7グリッドで土坑状のSX825を検出した。平面形態は不整楕円形を呈する。長径は残存値で3.8m、短径は2.1mである。断面形態は弧状を呈するが、中央部分が深くなっている。深度は浅いところで約15cm、最も深いところで40cmである。底面にはビット状の落ち込みも多数認められる。覆土の堆積状況に着目すると、平面プランの中央部には地山土を基調とした覆土が堆積し、その部分と地山との間にはⅢ層が帯状に観察された。断面でも土層の逆転現象が認められた。また、底面近くでは樹根の一部を検出した。このような覆土の変則的な堆積は、倒木痕の特徴〔能登1974〕と共通する。SX825は人為による遺構ではなく、倒木痕であると判断した。

D 樹根 (図版3・4・9)

樹根は2か所で確認した。SX826は29Z・Aグリッド、SX827は27Z・A、28Z・Aグリッドに位置する。SX827は樹芯部分が覆乱されていたものの、根が放射状に張っていた様子がうかがえる。これらの樹根はⅦ層中で根を張っており、その一部はⅢ層及びⅦ層掘削中に検出した。これらの樹根の樹種は、いずれもスギであった。また、樹根の枯死年代を調べるため、最外年輪から試料を採取して放射性炭素年代測定を行ったところ、39cal BC～47cal AD及び342～115cal BCという結果が得られた。この年代は、弥生時代中期から後期頃及び弥生時代中期頃に相当する(第VI章)。姫御前遺跡6区流路で出土した多量の木材の枯死年代は、日本版較正曲線を用いたウィグルマッチングによっておよそ70～100cal ADにまとまるという結果が出ている。両者では大きな年代差があるように思えるが、SX826については613C補正したLibby Ageで比較すると一致する史料もある。較正年代の相違は、利用した較正プログラムの相違によるものであり、SX826の枯死年代は近似すると考えてよいであろう。ただし、このような条件を差し引いてもSX827の枯死年代は、古い値を示している。これら木材の枯死年代は、鬱蒼としたスギ林の開墾時期を反映するものと考えられる。

なお、Ⅶ層上面においては遺構とは覆土が異なり、より粘性の強い部分的な落ち込みを多数検出した。落ち込みに対しては断ち割り調査を行い、木の根を検出したこと、断面形が斜めに細く潜り込んでいること、落ち込みが不規則な放射状に分布することなどから、人為的な掘り込みではなく、樹木痕や倒木痕であると判断した。

第V章 遺 物

1 概 要

2012年度調査区においては、Ⅱa層から17世紀代、Ⅱb層から15～16世紀、Ⅲ層から弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする遺物が出土した。基本層序は、南側に隣接する2008年度調査区と対応し、出土遺物の年代も一致する。

Ⅱa・Ⅱb層からは中近世の陶磁器類がコンテナ3.5箱(箱の内寸:54cm×34cm×10cm)出土しており、その破片数はⅡa層で52片、Ⅱb層で311片である。Ⅱb層の遺物については、これまでの報告〔加藤_{2011a}〕に準じて産地・器種別の出土破片数を提示した(第1表)。陶磁器の種類は、2008年度調査と同様にバラエティーに富み、14～17世紀代の生活雑器のほか、茶道具や瓦器が含まれていた。当遺跡は、2008年度調査における自然科学分析の結果から、中世以降は水田であったと想定できる〔金原2011〕。しかし、出土遺物から付近に茶を嗜むことができる比較的財力のある階層が存在したことをうかがい知ることができた。また、祭祀関連遺物と考えられる箸状木製品(ほか木製品1箱)・銭貨(ほか金属製品0.5箱)・焼骨(5.3g)の存在も特徴的である。

弥生時代後期から古墳時代前期の土器は、3箱出土した。土器は、Ⅲ層とⅣ層(地山)の境から出土するものが多い。それらは細片で、器形を復元できる土器は少ない。ほかに石器が1箱出土した。

2 土器・陶磁器

A 中世～近世の土器・陶磁器

中世から近世の土器・陶磁器の記述に当たっては、青磁は〔上田1982〕、白磁は〔森田1982〕、15世紀代の青磁・白磁は〔水澤2004〕、青花は〔小野1982〕、瀬戸焼・美濃焼(以下、「瀬戸美濃」とする。)は〔藤澤2008・2009〕、珠洲焼(以下、「珠洲」とする。)は〔吉岡1994〕、瓦器は〔水澤1999・2009〕、中世土師質土器は〔水澤2005〕、肥前系陶磁器は〔大橋1989〕、越中瀬戸焼(以下、「越中瀬戸」とする。)は〔宮田1997、相羽2003〕の分類・年代観を参考にした。

実年代については、瀬戸・美濃は古瀬戸後期様式Ⅰ期=1360～80年頃、Ⅱ期=1380～1420年頃、Ⅲ期=1420～1440年頃、Ⅳ期古段階=1440～60年頃、Ⅳ期新段階=1460～80年頃、大窯Ⅰ段階=1480～1530年頃、大窯2段階=1530～60年頃、大窯3段階=1560～90年頃、大窯4段階=1590～1610年頃である。珠洲は吉岡Ⅱ期=13世紀前半、Ⅲ期=13世紀後半、Ⅳ期=14世紀第1四半期～第3四半期、Ⅴ期=14世紀第4四半期～15世紀前半、Ⅵ期=15世紀後半である。肥前系陶磁器は大橋Ⅰ-1期=1580年代～1594年、Ⅰ-2期=1594年～1610年代、Ⅱ-1期=1610年～1630年代、Ⅱ-2期=1630年～1650年代、Ⅲ期=1650年代～1690年代である。それ以外の年代については文中に示した。

時期	分類	産地	瀬田川					高瀬川		石川		その他							年数	合計 (点数)																
			入口	橋	林	井	井	瀬田川 (石川)	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井			井	井														
中世	瀬田川	青瓦		1																						1										
		青磁	6	5		1																					4	18								
		白磁	1	2	1																							4								
		青白磁																										0								
		瀬田川口 瀬田川																										0								
	高瀬川	瀬田川	6	5	R			1																				2	25							
		瀬田川																																		
		瀬田川							38																				6	100						
		瀬田川									3																		3							
		瀬田川										1																	1							
石川	瀬田川	瀬田川																										2								
		瀬田川																																		
		瀬田川																																		
		瀬田川																																		
		瀬田川																																		
	高瀬川	瀬田川																																		
		瀬田川																																		
		瀬田川																																		
		瀬田川																																		
		瀬田川																																		
石川	瀬田川																																			
	瀬田川																																			
	瀬田川																																			
	瀬田川																																			
	瀬田川																																			
合計		8	18	111	1	1	1	40		111		2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16	311								

第1表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別破片数(原前田・II層層)

1) 椀 類 (図版5・11-1~12)

1~3は瀬戸美濃の天目茶碗である。1・2の釉薬は黒味を帯びた褐色であるのに対し、3は明るい黄色味を帯びた褐色を呈する。釉薬の色調が時期を決める判断基準のひとつとなる。1は古瀬戸後期様式III期、2は古瀬戸後期様式IV期古段階、3は大窯第4段階に比定される。

4~7は龍泉窯系青磁である。4は釉薬を厚く掛ける端反碗で、上田分類のD-II類、水澤分類の厚軸端反碗である。製作年代は1430年代から15世紀代である。5にも釉薬が厚くかけられていることから、水澤分類の厚軸端反碗と考えられる。高台の施軸に着目すると、高台内面の途中まで軸がかかるが、底外面の釉薬は削り取つたとみられる。上田分類のD-II-b類の可能性ある。6の口縁部外面には雷文帯が施されるもので、上田分類のC-II類、水澤分類の直線雷文帯碗である。7は外面に篋摺蓮弁文が施されるもので、上田分類のB-IV類、水澤分類の直線篋摺蓮弁文碗である。

8は白磁である。内面の見込み近くには沈線が一条流る。軸調はやや青味を帯びた灰色を呈する。森田C群に属する端反碗と考えられる。

9・10は越中瀬戸である。9は丸椀で内外面に鉄軸が施されるもの、底部付近には施軸されていない。高台は削り出し高台で、砂粒の動きからクロクの回転方向は右回転である。10は天目茶碗で、内外面に鉄軸が施されている。9・10ともに17世紀代の所産である。

11は肥前系磁器である。器形は丸椀で、外面には染付が施される。大橋II期に比定される。

12は肥前系陶器である。器形は筒形で、外面には鉄軸が施される。器面及び胎土に細かな黒色の吹き出しが認められる。大橋II期に比定される。

2) 皿 類 (図版5・11-13~30)

13~15は龍泉窯系青磁である。13・14は種花皿である。13の外面には蓮弁文、口縁内側には摺摺波状文が施される。15は口縁部が欠損しているため、器種を特定できないが、水澤分類の摺摺端反皿、または種花皿と考えられる。これらは15世紀末から16世紀前半の所産である。

16～18は白磁である。16は八角杯である。軸調はやや黄色味を帯びた白色である。15世紀末から16世紀前半の所産である。17は内湾皿である。軸調はやや黄色味を帯びた白色である。15世紀代の所産である。18は扶高台全面施軸皿であり、15世紀前半の所産である。16～18は森田D群に属する。

19は青花で、小野分類の染付皿C群である。15世紀後半から16世紀前半の所産である。

20～22は瀬戸美濃の緑釉小皿である。20の軸調はふい黄色味を帯びた緑色に対し、21は透明感の強い緑色を呈する。20は古瀬戸後期様式Ⅳ期、21は大室第1段階に比定できる。22は21に軸調が似るころから、大室第1段階に比定できると考えられる。

23～29は土師質土器の皿で、いわゆる「かわらけ」である。土師質土器皿の分類については『姫御前遺跡Ⅱ』の分類【相羽2011】を参考にした(第2表)。2008年度調査と同様に、「ロクロ成形」と「手づくね成形」に二分される。23～25はロクロ成形の土師質土器皿である。23は2類、24は3類に属する。24の口縁端部にはススが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。25の底部には回転系切り技法によって切り離された痕跡がわずかに残っている。26～29は手づくね成形の土師質土器皿である。26・27は2類、28・29は5類に属する。29は非常に薄手の器壁で、口縁部が大きく開く特徴から、15世紀代の京都系土師質土器である。27には光沢があるススの付着が認められ、灯明として使用されたと考えられる。

3) 水注・盤・鉢・瓦器 (図版5・11 - 31～36)

31は瀬戸美濃である。器形の上部が残存していないため器種を断定することは難しいが、内面には明瞭なロクロ目が残ることから袋物と考え、底径(5.8cm)の大きさから水注と判断した。わずかに残る底部外面には、回転系切り痕が残る。内外面には緑釉が施されている。

32は青磁の盤である。細片であるため、『姫御前遺跡Ⅱ』の青磁盤(図版36-報告番号75)を参考に図化した。内面には幅広い蓮弁紋が施されている。軸調は透明感の強い緑色を呈し、軸葉は比較的厚く掛けられている。

33は瀬戸美濃の椀形鉢である。外面の下半はロクロ削りて整えられている。古瀬戸後期様式Ⅱ期からⅢ期に比定できる。

34は肥前系磁器の鉢である。内面には染付が施されている。大橋Ⅱ-2期に比定できる。

35・36は瓦器である。35は風炉と考えられる。外面の色調はふい橙色を呈する。外面には尖帯が一条走り、器面は丁寧にミガキが施されている。36は体部が内湾する風炉Ⅱ類【水澤2009】と考えられる。器壁が非常に厚く、外面の色調は橙色を呈する。外面はスタンプ文で裝飾され、二条の尖帯の間に「×入重画紋」【水澤2009】が、その文様帯の上位に蓮弁文が連続的に巡る。

4) 甕 類 (図版5・11 - 37～40)

37～40は珠洲の甕である。37・38は口縁形態から、37は吉岡Ⅳ-2期、38は吉岡Ⅴ期に比定される。39は体部片、40は底部片である。

成形技法	分類	口径
手づくね成形	1類	8cm前後
	2類	9～10cm前後
	3類	10～11cm前後(浅身)
	4類	10～11cm前後(深身)
	5類	14～16cm前後
	6類	19cm前後
ロクロ成形	1類	6.5cm前後
	2類	7～10cm前後
	3類	11cm前後
	4類	13～17cm前後

第2表 中世土師質土器皿の分類
【相羽2011】より

5) 壺 類 (図版6・12-41~44)

41は珠洲の壺R種である。器面に残る砂粒の動きから、ロクロの回転方向は右方向である。底部外面には静止糸切り痕が残る。

42~44は越中瀬戸である。42・43は広口壺である。42は口縁部が直立する相羽分類のD類である。43は口縁部が肥厚し、わずかに外反する相羽分類のB類である。42・43ともに口縁部が摩耗している。44は底径の大きさ、立ち上がりの角度から、広口壺の底部と判断した。底部外面には回転糸切り痕が残る。内外面に鉄軸が施される。

6) 片口鉢・擂鉢類 (図版6・12-45~51)

45~50は珠洲である。45・47~49は口縁部に波状文を有する。口縁部の形態から吉岡V期に比定される。51は越中瀬戸である。17世紀代の所産である。

7) 加工円盤 (図版6・12-52~54)

52~54は土器・陶磁器の破片を素材とする加工円盤である。側縁に連続的な割離を施し、平面形を略円形に仕上げられるものである。加工円盤の分類は、[相羽_監, 2011]を参考にした(第3表)。加工円盤は7点出土し、素材別に分けると、珠洲が6点、肥前系陶器が1点である。珠洲を素材とするものはすべて1類に分類され、そのうち2点を図示した。52・53は叩き成形の罫が用いられている。52の直径は2.4cm、53は直径2.9cmである。54は肥前系の皿が用いられている。内面には蛇の目輪割ぎの痕跡が残る。大橋編年Ⅲ期からⅣ期に比定される。直径は推定7.6cmで、4b類に分類される。なお、2012年度出土分を含めた姫御前遺跡の加工円盤集計表は第4表である。

直径	素材	分類
22~29mm	-	1類
31~39mm	無	2a類
	有	2b類
44~58mm	無	3a類
	有	3b類
61mm~	無	4a類
	有	4b類

第3表 加工円盤の分類
[相羽_監, 2011]より

分類	素材											合計	
	珠洲	越前	白磁	青磁	青白磁	青花	全明陶器	瀬戸瓦器	越中瀬戸	肥前系陶器	京焼		土師器
1類	27	6										1	34
2a類	6	1		1	1				1			1	10
2b類												1	1
3a類									1			7	8
3b類			1	1		1		7					10
4a類	1								1				2
4b類				1			1		1	1	4		7
合計	34	7	1	3	1	1	1	9	2	4	1	8	72

第4表 姫御前遺跡・竹花遺跡出土の加工円盤集計表

([相羽_監, 2011]に一部加筆。変更した数値はゴシックで表記。)

8) 土 鉢 (図版6・12-55・56)

管状土鉢は3点出土し、そのうち2点を図化した。55は残存長で3.1cm、外径は推定で4.1cmである。外面は摩耗し、調整痕は不明瞭である。56は残存長で6.6cm、外径は推定で5.0cmである。外面には手で握って成形した指頭圧痕が残る。55はⅡb層、56はⅢ層から出土した。同様の土鉢は、2006年度・2008

2 土器・陶磁器

年度調査においても定量出土しており、そのほとんどがⅡ a・Ⅱ b 層から出土している。このような状況を鑑みれば、2012 年度調査で出土した土鉢についても中世から近世初頭の所産と考えられる。

B 古代の土器 (図版 6・12-57)

古代の土器は須恵器が 2 点出土し、そのうち 1 点を図化した。57 は須恵器の無台杯である。胎土はやや粗く、石英、白色粒子、海綿骨針が混入する。産地は不明であるが、胎土の特徴は青海地区の西角地窯産の須恵器と類似する。時期は【春日 1998】のⅡ期に比定され、8 世紀末～9 世紀初頭に位置づけられる。出土層位はⅡ b 層の下位であり、このような須恵器の出土状況は 2008 年度調査と同様の傾向を示す。また、細片のため図化しなかったが、胎土の特徴から佐渡小泊産と考えられるのも 1 点出土した。

C 弥生時代～古墳時代の土器

1) 土器の分類

弥生時代から古墳時代の土器の分類は、滝沢規朗氏の分類【滝沢 2005】に基づくこととした。同一基準による観察の蓄積が重要と判断したことから、分類名称は本報告で独自に付さず、滝沢分類を踏襲することとした。器種は甕・壺・高坏・器台があるが、分類できたものは甕や壺の一部に限られる。なお、年代観については、2008 年度調査と同様に弥生時代後期から古墳時代前期に比定される。

2) 各 説 (図版 6・12-58～74)

58～61 は甕である。58 は有段口縁無文壺で、甕 B 類である。59 は口縁端部が丁寧に面取りされていることから甕 C 2 類である。60・61 は口縁端部が面取りされずにナデおよび横方向のハケで整えられていることから甕 C 3 類である。

62～66 は壺である。62 は壺 L 類である。細口の有段口縁を呈し、口縁部下段が短い。口縁部内面には横方向のハケが施される。63 は細口の有段口縁部分で、口縁部下段が短いことから壺 L 類の可能性が考えられる。64 の口縁部には帯状の粘土紐を貼り付け、一段厚く作り出している。65 は細口壺の頸部である。66 は壺の底部である。

67 は高坏または器台の口縁部である。内外面は横方向のミガキで丁寧に整えられ、赤彩されている。

68～71 は高杯の脚部である。

72・73 は器台または高杯の裾部である。73 の内外面は横方向のミガキで丁寧に整えられ、赤彩されている。

74 は土鉢である。形状は直径 4 cm 程度の球形を呈する。軸棒に粘土を巻き付け、表面を撫でることで整形している。全体に摩擦しており、調整痕は不明瞭であるが、わずかに指頭圧痕が認められる。胎土には石英、長石、砂礫が含まれ、やや粗い。焼成は良好で、色調は黄灰色である。Ⅲ層から出土したこと、弥生時代後期から古墳時代前期の土器と胎土が共通することから、中世の土鉢とは区別した。

3 石器・石製品 (図版7・13-75~80)

背面に円鏢面を有する剥片を素材とする石器が4点出土した。2006・2008年度調査で出土した資料と合計すると86点となる。これらは、糸魚川地域で1986年から「貝殻状剥片」と呼ばれており〔小池1986〕、その技術的・形態的特徴については『姫御前遺跡II』において分析している〔加藤_{iss}2011a〕。なお、一般的な「貝殻状剥片 (conoidal flake)」とはニュアンスが異なるので注意する必要がある。75は貝殻状剥片である。打点付近に細かな剝離痕が重なることから、著しく凹むことが特徴的であるバルブは未発達で比較的平坦であり、末端部分では階段状剝離をなしている。これらの特徴は、ここでいう貝殻状剥片の特徴をよく表わしている。石材は安山岩である。76は横対形石器である。75で見られたのと同様の特徴を有する貝殻状剥片を素材としており、末端部分に微細剝離痕を連続的に施される。石材はひん岩である。

77・78は貝殻状剥片の石核である。石材は、77は安山岩、78は流紋岩である。このほかにもう1点、流紋岩製の貝殻状剥片石核が出土した。78は扁平な円鏢の端部を打点として剥片を剝離しているが、貝殻状剥片と対応するように、打点付近では細かな剝離痕が重なって凹んでいる。一方、77は剥片を剝離できていないが、円鏢の端部を執拗に敲打している様子が見て取れる。この過程を経て、潜在的な割れを発生させ、剥片を剝離したと考えられる。なお、いずれも主要な剝離面と相対する位置に敲打痕のような凹み(77)や剝離面(78)が観察される。両側から挟みこむように加撃した可能性が想定される。

79は敲石である。石材は砂岩である。長楕円鏢の上下両端に敲打痕が形成される敲石は、弥生時代後期から古墳時代前期に特徴的に認められる。特に、糸魚川市から上越市付近に、その遺跡が集中する傾向にある。目的は定かでないが、地域・時期を特定し得る指標的な形態といえるかもしれない。

4 金属製品・鍛冶関連遺物 (図版7・13-81~87)

金属製品には銭貨があり、調査区全域から鍛冶関連遺物が出土した。すべてⅡa・Ⅱb層から出土しており、中世から近世の遺物と判断した。

81~85は銭貨である。銭貨6点出土し、そのうち銭種のわかる資料5点を図示した。すべて北宋

銭で、初鑄年の古いものから天聖元寶(1023年初鑄)、嘉祐通寶(1056年初鑄)、熙寧元寶(1068年初鑄)、政和通寶(1111年初鑄)である。北宋銭が多く出土した点については、これまでの調査成果と同様の傾向を示す(第5表)。

鍛冶関連遺物は羽口と鉄滓が出土した。羽口は2点出土し、そのうち1点を図化した(86)。推定される外径は8.6cm、内径は2.1cmほどである。刃に接する部分に相当するようで、残存する端部には黒色ガラス質の付着物が帯状に認められる。鉄滓は16点、730gが出土し、すべて磁着することから含鉄滓と

	新・後漢銭	唐銭	五代十国	北宋銭	南宋銭	元銭	明銭	不明・無文銭	合計
姫御前遺跡Ⅰ	0	0	0	8	1	0	4	0	13
姫御前遺跡Ⅱ	0	4	0	37	2	0	3	6	52
姫御前遺跡Ⅲ	0	0	0	5	0	0	0	1	6
竹花遺跡Ⅰ	0	3	1	31	2	1	3	8	49
竹花遺跡Ⅱ	2	4	0	14	1	0	3	4	28
合計	2	11	1	95	6	1	13	19	148

第5表 各遺跡における出土銭貨数量表 (単位:枚)

5 木 製 品

判断した。うち残存状況が良好な椀形滓1点を図化した(87)。表面には炭化材の付着が見られる。

Ⅱ a 層から出土したものは1点で、そのほかはⅡ b 層からの出土である。第9図は姫御前遺跡から出土した鉄滓と羽口の出土分布図である。37B グリッドを中心とする範囲のほかに、29A グリッド周辺からも鉄滓が多く出土する傾向がある。29A グリッド周辺は2012年度調査範囲に当たるが、鍛冶に関連する遺構は検出されていない。

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19		
											(2012年度調査範囲)	1											Σ
2	2	8	9	13	7	1			3	10	8	5	5	1	3		2					2	A
19	192	206	612	258	208	1			26	404	560	69	61	6	87		24					21	
	5	19	36	23	18	1		4	3	19	12	1	2	14	4	1	5	1			1		B
	190	453	1162	673	613	108		29	158	243	274	18	29	389	273	2	153	54		1		1	
		1	144	4	40	2									2						1		C

(上段:鉄滓の個数, 中段:鉄滓の重量(g), 下段:羽口の個数, 変更した数値はゴシックで表記。)

([加藤, 2011a] に、一部加筆・修正)

第9図 鉄滓・羽口出土分布図

5 木 製 品 (図版7・13-88-89)

箸状木製品はⅡ b 層から6点出土し、そのうち遺存状態が良好な2点を図化した。88は長さ236mm、幅6mmである。断面多角形に表面を面取りしているが、両端は鋭利に尖っていない。88は地面に突き立てた状態で出土した(図版10)。89は欠損しているため全容は不明であるが、一方は尖らせている。おそらくは両口箸の一端であろう。

第VI章 自然科学分析

株式会社加速器分析研究所

1 姫御前遺跡出土木材の樹種

A はじめに

姫御前遺跡は、海岸砂丘と丘陵に挟まれた沖積地に位置する。本報告では、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層下から出土した、樹根と考えられる木材について樹種同定を実施する。

B 試料

試料は、SX826とSX827から出土した樹根2点(木材サンプル1・2)である。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定を実施した。

C 分析方法

剃刀を用いて木口(横断面)・柱目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 [1982] や Richter ¹⁾、[2006] を参考にする。

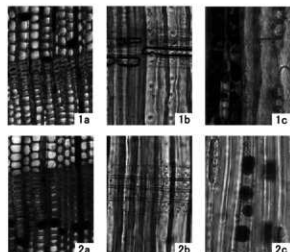
D 結果

木材は2点とも針葉樹のスギに同定された(第6表・第10図)。スギの解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)

スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に3-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。



1.スギ(SX826:木材サンプル1)

2.スギ(SX827:木材サンプル2)

a:木口, b:柱目, c:板目

100 μ m
100 μ m

遺跡	試料名	樹種
SX826	田原 木材サンプル1	スギ
SX827	田原 木材サンプル2	スギ

第6表 樹種同定結果

第10図 木材の顕微鏡写真

E 考 察

SX826とSX827から出土した樹根は、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層下から出土しており、いずれも針葉樹のスギに同定された。放射性炭素年代測定の結果、木材サンプル1は弥生時代中期から後期頃、木材サンプル2は弥生時代中期頃に相当する年代値が示され、その時期の本地点のスギが生育していたことが推定される。スギは、現在の日本海側では扇状地扇端部の湧水地周辺や谷筋等の適湿地に生育している。当遺跡は、姫川と海川によって形成された三角洲に位置しており、その形成過程は扇状地に似るとされている。スギは、扇端部の遊水地周辺に生育していたことが推定される。

当遺跡及び隣接する竹花遺跡では、弥生時代から古墳時代前期とされる自然木、及び縄文時代晩期、弥生時代かとされる自然木について樹種同定が実施されている【箱崎^{ほか},2011】。その結果をみると、弥生時代かとされる自然木と弥生時代から古墳時代前期の自然木ではスギが優占し、縄文時代晩期かとされる自然木2点もスギである。今回の結果は、これまでの調査結果とも調和的である。

引用文献

- 箱崎真隆・小川とみ・鈴木三男 2011 「新潟県姫御前遺跡及び竹花遺跡出土木材の樹種」『姫御前遺跡II-竹花遺跡I』新潟県埋蔵文化財調査報告書第207集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 130-142p
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語監修）海青社 70p
[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]
- 島地 謙・伊東 隆夫 1982 『図説木材組織』地球社 176p

2 姫御前遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

A 測定対象試料

姫御前遺跡は、新潟県糸魚川市東寺町2丁目1069-1 ほか(北緯37° 02' 33", 東経137° 52' 24")に所在し、海岸砂丘と丘陵に挟まれた沖積地に立地する。測定対象試料は、SX826出土木片（木材サンプル1:IAAA-121380）、SX827出土木片（木材サンプル2:IAAA-121381）の合計2点である（第7表）。試料はいずれも年輪最外部より採取した。これらは弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層下から検出した樹根の一部である。なお、同一試料の樹種同定が実施されている。

B 測定の意義

過去2回の発掘調査により、周辺地域の開墾年代（実年代）が、年輪年代測定及び放射性炭素年代測定とのウィグルマッチングによって明らかになっている。今回の調査で検出した樹根の年代を測定することで、過去の結果を検証する。

C 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AAa」と第7表に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

D 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシウロ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

E 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(第7表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する[Stuiver and Polach 1977]。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第7表に、補正していない値を参考値として第8表に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同程度以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第7表に、補正していない値を参考値として第8表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース[Reimer et al. 2009]を用い、OxCal4.1較正プログラム[Bronk Ramsey 2009]を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに

2 姫御前遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

参考値として第8表に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

F 測定結果

試料の ^{14}C 年代は、SX826出土の木材サンプル1が $2000 \pm 30\text{yrBP}$ 、SX827出土の木材サンプル2が $2140 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1 σ)は、木材サンプル1が39cal BC ~ 47cal AD、木材サンプル2が342 ~ 115cal BCの間に各々複数の範囲で示される。木材サンプル1が弥生時代中期から後期頃、木材サンプル2が弥生時代中期頃に相当し〔小林2009〕、上位の遺物包含層の時期と矛盾しない。

試料の炭素含有率はいずれも50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	μMC (%)
IAAA-121380	木材サンプル1	SX826 田原	木片	AAA	-25.62 ± 0.49	$2,000 \pm 30$	77.98 ± 0.25
IAAA-121381	木材サンプル2	SX827 田原	木片	AAA	-25.44 ± 0.41	$2,140 \pm 30$	76.61 ± 0.24

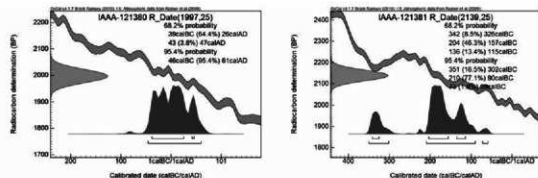
第7表 測定結果 (補正值)

[#6319]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年較正範囲	2 σ 暦年較正範囲
	Age (yrBP)	μMC (%)			
IAAA-121380	$2,010 \pm 20$	77.88 ± 0.23	$1,997 \pm 25$	39calBC - 26calAD (64.4%) 43calAD - 47calAD (1.8%)	46calBC - 61calAD (95.4%)
IAAA-121381	$2,150 \pm 20$	76.54 ± 0.23	$2,139 \pm 25$	342calBC - 326calBC (4.8%) 204calBC - 157calBC (46.3%) 136calBC - 115calBC (13.4%)	351calBC - 302calBC (10.0%) 210calBC - 90calBC (71.1%) 73calBC - 59calBC (1.8%)

第8表 測定結果 (非補正值)

[参考値]



第11図 暦年較正年代グラフ

引用文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林謙一 2009 「近畿地方以東の地域への拡散」西本豊弘編「新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」藤山園 55-82p

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第七章 ま と め

姫御前遺跡の発掘調査は、今回で3回目となる。合計で7,027㎡を調査しうち、本書に関わる調査は227㎡に過ぎない。加えて、前回調査の報告書において、様々な観点から総括しており、ここで新たな所見を提示することは難しい。ここでは3回にわたって実施した調査成果を要約して、まとめにかきたい。

1 旧地形の復元

姫御前遺跡は、丘陵裾と海岸砂丘に挟まれた沖積地（三角州）に立地する。遺跡周辺は、洪水堆積や宅地造成を経た現在でこそ平坦であるが、かつては起伏に富んだ地形にあったことが分かった（図版1）。総延長400mに及ぶ調査範囲内のうち19～23列周辺が最も高く、遺構検出面（Ⅶ層上面）の標高は4.5mほどで、西側に向かって地形が緩やかに落ち込んでいた。西端の38～40列では3.8mほどであり、遺跡内でも明瞭な高低差がある。このうち、弥生時代後期～古墳時代前期に集落が築かれたのは、標高も最も高い19～23列周辺に当たる。また、西側は標高が徐々に下がっていき、水田が築かれた竹花遺跡の標高は3～1.5mほど（東側が高く、西側が低い）となる。居住域が築かれた範囲と1.5～3mほどの高低差があり、この地形が土地利用に反映されたと考えられる。

起伏は西方だけでなく、南北への落ち込みも検出した。15～17列では、南北に向かって落ち込む様子が観察され、瘦せ尾根状の高まりに若干の遺構が存在した。今回の調査では、27～29列周辺でも同様の状況にあることが分かった。北側には、海岸砂丘の後背湿地が広がっていた可能性が高く、その縁辺部を検出したと考えられる。一方、山側に相当する南側が落ち込むことは少々、意外であった。南側の落ち込みは、15～17・27～29列で認められたほか、24・25列においては切土によって成形した岸辺SR202を検出した。SR202は舟着場の可能性があり、舟が往来できる流路などの滞水域が存在したことを示唆する。

このように、南北両側を滞水域に挟まれた瘦せ尾根状の高まりに集落が築かれたといえる。何故に、このような立地条件を選択したのか、あるいは選択せざるを得なかったのか、今後、周辺地域の調査においては十分留意すべきである。

また、31～39列では遺跡を東西に分断するように流路を検出した。弥生時代後期～古墳時代前期においてはこの流路を境に、東側に居住域、西側に水田域が広がっていた可能性が高い。この流路は、位置関係からかつての運台寺川であると推定される。31～34列付近で流れを西側に大きく変えて城ノ川と合流し、日本海に注いでいたと見られる。この川は、途中、海岸砂丘列を横断するため、降雨量が多い時や波の高い時は、川の水がスムーズに海に流出しなかったようである。

寛政4（1792）年9月の大雨では、「海から高波が城の川へ打ちこみ、砂が溜まって川水が流れなくなつた。おまけに大雨とあって、江筋の水が流れこみ、城の川橋の上まで、水が上がってしまった。」という。町裏（竹花遺跡・姫御前遺跡周辺）が水たまりになった状況が、『町年寄 御用留帳』に次のように記されている【青木1979】。

「やがて水溜りは、善導寺辺より、南一の宮 森下、東は押上 裏まで水たまりこれあり候。潮水湧々にて、

2 弥生時代後期

囲ひ材木、わらにお 等、残らず流れ、田んぼの間に浮き申し候て、追々、筏に乗り候て、主々ども取り入れ申し候通り、珍しき大変にござ候。」

この文献からは、竹花遺跡・姫御前遺跡が立地する丘陵縁と砂丘間の沖積地一面が水没したことが分かる。城ノ川・蓮台寺川は、上流部は急勾配であるが、沖積地に入ると勾配が緩やかで、かつ海岸に達する直前には砂丘列を横断する。このような環境にあることから、洪水を起こしやすい河川と考えられ、砂丘裏の沖積地が水没しやすかったと考えられる。

2 弥生時代後期

糸魚川平野においては縄文時代晩期以降、鬱蒼としたスギ林が広がっていたことが自然科学分析によって明らかになっている [加藤_他 2011a]。このスギ林の開墾年代が弥生時代後期 (新潟シンガ編年1・2冊、第9表)、実年代で言うとAD70～100年頃に相当することが、2008年度調査によって明らかになった。今回の調査においても、検出した樹根の枯死年代を調べるため放射性炭素年代測定を行ったところ、2008年度調査に近似する結果が得られた。しかし、弥生時代中期に遡る試料も見られたことから、開墾の開始年代が更に遡る可能性がある。いずれにしても、この頃にスギ林が伐採され、平野部の開発が本格化したことを具体的に裏付けられたことは重要な成果といえる。花粉分析・植物珪酸体分析によれば、これ以降、スギ林が減少していき、これと相反するように水田が広がっていくことが明らかとなっている。糸魚川地域の環境変遷においては、重大な画期であったといえよう。なお、開墾されたと推定される年代は、糸魚川地域における弥生時代後期～古墳時代前期の中核的な集落・笛吹田遺跡の開始年代と合致する。笛吹田遺跡は、平野部を開墾する上で重要な役割を果たしたと考えることができる。

時代	実年代	縄文 2005	川村 2000	田嶋 1986・1988	北條 (南西部) 型式・様式 伊達寺・戸木B	田辺 1981	姫御前	
弥生時代 後期	AD0 (°C)	1期		溝町1群	堀橋		I期	
	AD100 (°C)	2期		溝町2群	徳広			
	AD169 (年輪)	3期		溝町3群	月影			
		4期		溝町4群				
	終末期		5期	1段階	溝町5群	白江		II期
			6期	2段階	溝町6群			
		AD258 (年輪)	7期	3段階	溝町7群			III期
			8期	4段階	溝町8群	古府? A七		
			9期	5段階	溝町9群			IV期
			10期	6段階	溝町10群	高島		
古墳時代 前期			7段階	溝町11群			V期	
			8段階	溝町12群		TK73		
	AD400		9段階			TK216		
			10段階	溝町13群		GN46		
						TK208		
						TK23		
						TK47		
						MT15		
	AD500			12段階	溝町14群		VI期	
				13段階	溝町15群			
			14段階		TK10			
			15段階		MT85			
			16段階		TK43			

※ AD169 (年輪) は大森内 SE18、AD258 (年輪) は、二口から取れた SX208 による。

第9表 弥生時代～古墳時代の編年と実年代 (〔春日 2008、滝沢 2010〕をもとに作成)

3 弥生時代終末期～古墳時代前期

弥生時代後期(新潟シンボ編年1・2期)にスギ林の開墾が本格化した後、弥生時代終末期(新潟シンボ編年5期頃)になると平野部に集落が築かれ始める。新潟シンボ編年5期頃に築かれたと見られるSI216は、1辺7mの規模をもつ平地建物で、周囲を周溝が廻っている。規模の大きさや構造を考慮すれば、集落内における中核的な建物であったと考えられる。この建物が構築されたのと時期を同じくして、竹花遺跡で最も古い水田が耕作され始める。同時期(新潟シンボ編年5期)の遺構の標高を比較すると、姫御前遺跡の平地建物SI216が4.5m、竹花遺跡の水田畦畔SX119が1.8mであり、両者では2.7mもの標高差がある。この標高差を利用して、土地利用を区分していたことは明白である。また、同時期に築かれた笛吹田遺跡や南押上遺跡と比べると、遺物量(土器・玉作関連資料)が少なく、集落の規模も小さい印象を受ける。したがって、周辺地域においては中核的な集落ではなかったと考えられる。

また、新潟シンボ編年5期以降、6期以前には火山灰が降灰していることが分かった。火山灰の下位からは5期、上位からは6期の遺物が層位的に出土したことから、降灰時期を具体的に絞り込むことができた。この火山灰の給源は明らかでないが、粗粒の軽石を含むことや、火山ガラスの付着した角閃石が伴うことから、比較的近傍にあったことが想定される。近傍の活火山は焼山があるが、該期の活動は知られていない。

姫御前遺跡で検出した火山灰は、新潟市北区正尺C遺跡において検出した給源不明の古墳時代前期の火山灰[卜部・高濱2001]と化学組成が良く似ることも分かった。しかし、化学組成領域に若干の相違が認められ、姫御前遺跡と同じ組成領域を持つ山岸遺跡・上越市下割遺跡と、正尺C遺跡と同じ組成領域を持つ正尺A遺跡・山岸遺跡・上越市吹上遺跡とに分けることができた。両者では噴出年代も若干異なる。姫御前遺跡の火山灰の降灰年代は5～6期に位置付けることができる一方、正尺C遺跡の火山灰の降灰年代は7～8期に位置付けられる。しかし、全体的には化学組成領域は近似しており、同一起源の一連の活動によって噴出した火山灰である可能性が高い。給源が定かでないものの、今後、新潟県域においては指標火山灰として活用することができよう。

この火山活動によって、糸魚川地域に如何ほどの影響が生じたのであろうか。二次堆積物とは言い、窪地でビュアな状態で残存していたことから、相当量の火山灰が降灰したと想定される。花粉分析では、火山灰の二次堆積物層であるⅢc層でスギ林・クリ林が減少し、二次林が一時的に増加したとされた。そして、その後に堆積したⅢb層では、スギ林・クリ林が再び増加し、森林が回復したとされた。Ⅲc層におけるスギ林・クリ林の減少要因を、火山活動に求められる可能性がある。そして、火山活動が一段落すると共に、スギ林・クリ林が回復したと考えられよう。このように、火山活動によって植生に変化が生じた可能性がある。

4 古墳時代中期初頭

姫御前遺跡から竹花遺跡にかけての低地部では、草本質泥炭(姫御前遺跡Ⅳ層・竹花遺跡Ⅳ層)の堆積が確認された。極めて特徴的な土層であるため、遺跡間・調査区間を対比する上での重要な指標とした。この特徴的な層位は、新潟シンボ編年11～12期に位置付けられる竹花遺跡の畦畔SX33を覆っており、

5 古墳時代中期・後期

その堆積時期は古墳時代中期初頭以降と考えられる。

草本質泥炭はアシの腐植からなり、一面が常時、水を湛える湿地帯に変貌したことを象徴する堆積物といえる。このような環境変化は、河川の流れが大きく変化したことに伴い、川の水が海へ流出しにくい環境になったことを反映する。例えば、流路の蛇行化・網目状化・狭小化や、河口の閉塞等を想定することができる。いずれも、多量の土砂が上流部から押し流されることによって、これらの状況が引き起こされたと考えられる。上流部で何らかの自然災害が発生し、土砂を下流部に供給したと考えられよう。

草本質泥炭の堆積と共に、標高の低い竹花遺跡は水没し、一面に広がっていた水田は一時的に放棄されたと見られる。竹花遺跡では、弥生時代終末期～近世に至るまで、連続的に水田耕作が行われたことが植物珪酸体分析から明らかになっているが、草本質泥炭が堆積した時期のみ、イネの植物珪酸体が激減する。急激な環境変化に対応できず、水田を放棄せざるを得なかったのであろう。

草本質泥炭の堆積の終わりは、常時、水を湛えた湿地帯の減少を意味する。すなわち、川の水が円滑に海に流出するように変化しただけといえる。当時の土木技術を考えれば、河川改修が行われたことも想像に難くない。湿地帯の水が引くと共に、急速に水田化が進むことが花粉分析・植物珪酸体分析から明らかになっている。そして、砂丘と丘陵の間の沖積地は、一面に水田が広がるような景観へと変化していったのであろう。

5 古墳時代中期・後期

古墳時代中期に入ると、集落の立地条件が一変する。中期以降の拠点的な集落である田伏遺跡（中期～後期）〔関 1972〕や一の宮遺跡（後期）〔糸魚川市役所 1986〕は、丘陵先端部に立地する。沖積地が湿地帯化及び水田化したのに伴い、小高い環境に居住域を移動させたのであろう。この頃から、沖積地の水田が著しく拡大し、集約的な生産を行う環境が整えられたと考えられる。少なくとも前期に見られたような、沖積地に集落が点在するような在り方から一変したと考えられる。ただし、このような遺跡立地の変化の背景は、環境とともに社会組織の変化についても考慮する必要があるであろう。いずれにせよ、糸魚川地域の土地利用の変化を知る上で、重大な画期と位置付けることができる。

6 古 代

古代の遺物は数少ないが、いずれもⅡb層の最下位から出土しており、Ⅱb層堆積の開始年代を示すと考えられる。出土遺物は、主に須恵器杯の破片であるが、青海地区の西角地窯産のものが主体となる。古代の集落は、六反田遺跡を除き、主に丘陵上に立地する。古墳時代以来、砂丘と丘陵端部の間の沖積地では、水田が営まれていたと考えられる。

7 中 世

Ⅱb層からは、15世紀代を中心とする遺物が多数出土した。出土した陶磁器の年代は、14世紀後半～16世紀第1四半期にまとまりがあり、16世紀第2～3四半期には希薄となる。その後、16世紀末～17世紀代に再び増加し、18世紀以降は再び希薄となる。このうち15世紀代の陶磁器が、質・量・種

類ともに最も充実しており、遺跡の中心となる時期であったと考えた。いずれも破片であるもののバラエティーに富み、生活雑器から香道具・茶道具などの奢侈品、城館や寺院等に特徴的に認められる瓦器〔水澤1999〕も出土した(第10表)。陶磁器の構成から考えると、近隣に有力者が存在したことは確実に見られる。

分類	品名	弥生後					古墳後				その他							不明	合計(割取)						
		大口	横	長	形	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類			類	類				
弥生	土器	7	15	1																1	24				
	青磁	116	31		4	3						1		1						2	14	172			
	白磁	7	63	9							1										1	5	86		
	青石																						1		
	新羅瓦	10																					12		
	今杖陶器			5											2								1	1	9
	瀬川瓦器	61	27	123			17	1				4	28	15	4	1						4	11	306	
	瓦																								
	瓦																								
	瓦																								
古墳	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
中世	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
	土器																								
合計	75	334	942	16	4	45	546				1259	57	17	5	4	2	0	2	13	30	95	3444			

第10表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別破片数(姫御前Ⅰ～Ⅲ・Ⅱa層・Ⅱb層)

陶磁器のほかに、祭祀との関連が想定される銭貨、箸・形代(人形・舟形・刀形)・下駄等の木製品の存在も注目される。これらの遺物組成は、一般的な集落の在り方とは著しく異なる。加えて、ヒト焼骨が破片の状態で散漫に出土したことも特筆される。このことは、近隣に葬送に関する場が存在したことを示している。ただし、調査対象地は墓域ではなく、水田であったことが植物珪酸体分析から明らかになっている。

それでは、どのような背景から、これらの遺物がもたらされたのであろうか。延徳3(1491)年3月、管領家細川政元にしたがって越後に下向した際に冷泉為広によって著された『越後下向日記』には、一行が糸魚川市寺町の観音寺に宿泊したことが記録されている。東北の馬を集めることを目的とした管領家の公的な旅の道中の宿とされたことは、糸魚川地域における観音寺の階層の高さを示している。『越後下向日記』が著された15世紀後半は、遺物量が最も多い年代と一致しており、近接する観音寺との関係について注意を払わなくてはならない。

観音寺は姫御前遺跡の西方600mに位置する。観音寺により近い竹花遺跡では、姫御前遺跡を上回る質・量の遺物が出土しており、観音寺との関係を考慮しておくべきであろう。観音寺との直接的な関係にまでは言及できないものの、遺物の供給源は、観音寺が面する加賀街道周辺であったことは想像に難くない。いずれにしても、姫御前遺跡から出土した遺物群は、加賀街道沿いに展開した中世糸魚川町の隆盛ぶりを示すものである。そして、15世紀代に築かれた中世の町が、近世の町の礎となったといえよう。したがって、現在、住宅地となっている加賀街道沿いに、中世の町並みが埋没している可能性が高いと言える。

要 約

- 1 姫御前遺跡は、新潟県糸魚川市東寺町二丁目1069番地1ほかに所在する。
- 2 調査は北陸新幹線の建設に伴い、2012年度に実施した。調査面積は227㎡である。2006年度（調査面積3,120㎡）、2008年度（調査面積3,680㎡）に続く3回目の調査で、調査面積の累計は7,027㎡である。
- 3 遺跡は、海岸線から350m内陸の沖積地に立地し、遺構検出面の標高は約4mである。現在、遺跡周辺は平坦であるが、かつては起伏に富んだ地形であることが分かった。
- 4 調査によって中世と古墳時代の遺構・遺物を検出した。
- 5 中近世の陶磁器は、青磁・白磁・青花・瀬戸美濃・珠洲・越前・越中瀬戸・肥前系陶器・瓦器・土師器がある。これらの年代は、14世紀後半～16世紀第1四半期頃と16世紀末～17世紀代にまとまりが認められた。植物珪酸体分析の結果、調査対象地周辺は水田であったと見られ、掘り込みを伴う遺構を検出することはできなかった。一方、著しい地面に突き刺さった状態で発見された。過去2回の調査結果を踏まえれば、水辺の祭祀が行われた可能性が高い。
- 6 弥生時代後期～古墳時代前期の集落の隣接地を調査した。ピット4基と土坑1基を検出し、土師器・横刃形石器、ヒスイ原石が出土した。
- 7 スギの樹根を2か所で検出した。枯死年代を調べるため、最外年輪から試料を採取して放射性炭素年代測定を行ったところ、弥生時代中期から後期頃及び弥生時代中期頃に相当する年代値（39calBC～47calAD、342～115calBC）が得られた。この結果は、2008年度調査で多量に出土したスギ材の枯死年代と近似しており、開墾された年代を反映する可能性がある。花粉分析・植物珪酸体分析によれば、これ以降、スギ林が減少していき、これと相反するように水田が広がっていくことが明らかとなっている。

引用・参考文献

- 相沢重徳 2003 「越中瀬戸広口壺に関する素樸一県内出土報告例から－」『研究紀要』第4号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相沢重徳 2011 「第Ⅲ章 姫御前遺跡 3 遺物 B 土器・陶磁器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第207集 姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相沢重徳^{ed.} 2002 『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅰ 寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相沢重徳^{ed.} 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第226集 竹花遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青木重孝監修 1979 『糸魚川市史4 近世3－江戸後期(中)－』新潟県糸魚川市役所
- 石川智紀^{ed.} 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第209集 前波南遺跡Ⅱ・伝神楽寺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 糸魚川市役所 1986 『糸魚川市史 資料編1』考古編 糸魚川市史編さん委員会監修 新潟県糸魚川市役所
- 今村 克・山岸洋一 2008 『須沢角地遺跡発掘調査報告書』新潟県糸魚川市教育委員会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁焼の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- ト部厚志・高瀬信行 2001 「正尺A・正尺C遺跡から産出した火山灰層の鉱物組成と火山ガラスの科学組成」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成12年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付焼。皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 依野正博 1986 「第6章 荘園と武士 第2節 荘園と国衙」『新潟県史』通史編1 古代・原始 新潟県
- 春日真美 1998 「西頸城地域における古代土器様相」『研究紀要』第2号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2008 「第Ⅴ章 まとめ 6 遺跡の存続期間」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実^{ed.} 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第228集 山岸遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2012 「糸魚川平野における環境変化と人々の営み－発掘調査結果と自然科学分析結果の総合的研究－」『第24回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 加藤 学^{ed.} 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 姫御前遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学^{ed.} 2011a 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第207集 姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学^{ed.} 2011b 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第225集 須沢角地遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金原正子 2011 「第Ⅴ章 科学分析 1 姫御前遺跡における自然科学分析 A 花粉分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第207集 姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男 1975 「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1 信濃史学会
- 木島 勉 2010 「山崎A遺跡」『第17回遺跡発掘調査報告会』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 木村宗文 1986a 「第5章 律令制下の越後・佐渡国 第5節 交通と運輸」『新潟県史』通史編1 原始・古代 新潟県
- 木村宗文 1986b 「第7章 古代の文化 第2節 神祀と仏教 1 弥彦神社と原多神社」『新潟県史』通史編1 原始・古代 新潟県
- 小池勝典^{ed.} 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第220集 南押上遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人 1986 「第Ⅲ章 遺跡各説 C. 岩野E遺跡 6. まとめ b. 石器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 新潟県教育委員会
- 坂井秀勇 1996 「水辺の古代官衙遺跡－越後平野の内水面・舟運・漁業－」『越と古代の北陸』小林昌二編 名著出版

引用・参考文献

- 佐藤友子²⁰⁾ 2009 『田伏山崎道跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 205 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木郁夫 1983 『I 地形分類 1 地形概説』『新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部総合整備課
- 鈴木郁夫 2000 『I 概説 1. 地形概説』『新潟県地質図説明書 (2000 年度版)』新潟県商工労働部商工振興課
- 鈴木俊成²¹⁾ 1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 51 集 小出越道跡』新潟県教育委員会
- 鈴木俊成・高橋昌也²²⁾ 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 54 集 野口下道跡・美山道跡』新潟県教育委員会
- 岡 雅之 1972 『田伏玉作道跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 岡 雅之 2004 『地域編 北陸 II 新潟県』『日本玉作大観』寺村光晴編 吉川弘文館
- 千家和比古・山本 肇 1979 『第 5 章 西角地古窯跡』『大角地道跡』大角地道跡発掘調査団編 新潟県青海町教育委員会
- 滝沢規朗 2005 『土器の分類と変遷 - いわゆる北陸系を中心に - 』『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現 (第 1 分冊)』新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2010 『山元道跡と北陸の弥生後期』『第 5 回 年代測定と日本文化研究 シンポジウム予稿集』シンポジウム事務局・株式会社加速器分析研究所
- 土田孝雄 1978 『第 2 章 調査の経過 1 発掘調査に至るまで』『笛吹田道跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 土田孝雄²³⁾ 1988 『須沢角地 A 道跡発掘調査報告書』新潟県青海町教育委員会
- 寺崎裕助 1988 『第 2 章 周辺の環境』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 50 集 原山道跡・大塚道跡』新潟県教育委員会
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴 1986 『第 4 章 古墳時代の社会と文化 第 4 節 玉作と祭祀』『新潟県史』通史編 1 原始・古代 新潟県
- 寺村光晴²⁴⁾ 1978 『笛吹田道跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 寺村光晴・安藤文一²⁵⁾ 1979 『大角地道跡 - 飾玉とヒスイの工房 - 』新潟県青海町教育委員会
- 日本考古学会 1935 『考古学雑誌』第 25 巻第 9 号
- 熊登 健 1974 『発掘調査と遺構の考察 - いわゆる「性格不明の落ち込み」を中心として - 』『信濃』第 26 号第 3 号 信濃史学会
- 平野田三・渡辺秀雄 1986 『西頸城郡』『日本歴史地名大系 15 新潟県の地名』平凡社
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 藤澤良祐 2009 『第 1 章 総論』『愛知県史』別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系 愛知県史編さん委員会 愛知県
- 水澤幸一 1999 『瓦器、その館造的なもの』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 9 集 帝京大学山梨文化財研究所
- 水澤幸一 2004 『15 世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相』『貿易陶磁研究』第 24 号 日本貿易陶磁研究会
- 水澤幸一 2005 『越後の中世土器』『新潟考古』第 16 号 新潟県考古学会
- 水澤幸一 2009 『瓦器の相貌』『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会
- 宮田進一 1997 『第 4 章 第 4 節 越中瀬戸の変遷と分布』『中・近世の北陸 - 考古学が語る社会史 - 』北陸中世土器研究会 桂書房
- 森田 勉 1982 『14 ~ 16 世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』第 2 号 日本貿易陶磁研究会
- 山岸洋一 2010 『笛吹田道跡』『第 17 回 道跡発掘調査報告書』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山田英雄 1986 『第 5 章 律令制下の越後 - 佐渡国 第 2 節 国郡制の成立・整備』『新潟県史』通史編 1 原始・古代 新潟県
- 山本有紀²⁶⁾ 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 229 集 六反田南道跡 IV』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 吉田東伍 1907 『大日本地名辞書』富山房
- 米沢 康 1976 『古代北陸道の伝馬制について』『信濃』第 28 巻 5 号 信濃史学会
- 米沢 康 1980 『大宝二年の越中国四部分割をめぐって』『信濃』第 32 巻 6 号 信濃史学会

観 察 表

遺構観察表 土坑・ピット

遺構番号	プロット	平面形状	構造形態	直径 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	高さ (cm)	出土遺物	切り出し状態	備考
SK819	31A11, 31Z15	方形か	石積み	500	78	43	3.87	土師細磁片 2点	-	-
PR06	31A6	円形	平石積	50	49	10	4.11	-	-	-
PR11	31A6	円形	土積	25	25	30	3.97	土師細磁片 1点	-	-
PR21	31Z10	矩形	V字状	243	39	27	3.99	-	-	-
PR24	31A12	円形	土積	16	16	12	4.1	-	-	-

※ 1 = 黒色土、白 = 白色土、赤 = 赤色土、青 = 青灰色土、緑 = 緑色土

遺構観察表 中近世土器・陶磁器 (1)

(※ 1 = 黒色土、白 = 白色土、赤 = 赤色土、青 = 青灰色土、緑 = 緑色土)

観測	位置	名称	プロット	形状	用途 (cm)		色調		胎土	製作時期	使用時期	備考	
					口径	高さ	内面	外面					
1	掘削 表層部	水日本朝	28A	17	0.5	12.2	-	栗色 7.5YR3/1 ~ 7.5YR3/2	灰白 10YR6/1 7.5YR3/1 ナシ	(内外) 黒釉	-	古瀬川後遺跡 1420 ~ 40年	
2	掘削 表層部	水日本朝	31A	1	0.5	12.6	-	黒釉 10YR3/1	灰白 10YR6/1 ナシ	(内外) 黒釉	-	古瀬川後遺跡 1440 ~ 60年	
3	掘削 表層部	水日本朝	28A	10	0.5	10.7	-	黒 10YR4/4	灰白 2.5YR/1 ナシ	(内外) 黒釉	-	古瀬川 1500 ~ 1610年	
4	古瀬	磨製陶器類	30A	22	0.5	16	-	オリーブ 10YR6/2	オリーブ 10YR6/2	灰白 2.5Y7/1 ナシ	(内外) 赤黒釉	-	上野川遺跡 1400年 - 15C 代
5	古瀬	甕	28A	4	0.5	-	7	オリーブ 5G/6/1	灰オリーブ 7.5YR3/1	灰白 5Y7/1 ナシ	(底外) 黒釉	-	-
6	古瀬	甕	28A	7	0.5	15	-	オリーブ 10YR6/2	オリーブ 10YR6/2	灰白 5Y7/1 ナシ	(内) 赤文	-	上野川遺跡 15C 前半
7	古瀬	磨製陶器類 蓋付短冊	28A	22	0.5	-	-	灰オリーブ 7.5YR3/2	灰オリーブ 7.5YR3/2	灰白 5Y7/1 ナシ	(内) 黒釉	-	上野川遺跡 15C 後半 - 16C 前半
8	古瀬	短冊	30Z	15	0.5	-	-	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	灰白 5Y7/1 ナシ	(内外) 黒釉	縁線あり	古瀬川 15C 後半
9	掘削 中層部	瓦	28A	21	0.5	-	4.8	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR3/3	にじみ 7.5YR3/3	(内外) 黒釉 黒釉	縁線あり	17C
10	掘削 中層部	水日本朝	30Z	5	0.5	10.8	-	黒 7.5YR4/3	黒 7.5YR3/3	黒 5YR6/1 ナシ	(内外) 黒釉	-	17C
11	掘削 中層部	甕	31A	12	0.5	12	-	灰白 10YR6/1	灰白 10YR6/1	灰白 10YR/1 ナシ	(内) 灰黒釉	-	古瀬川 1510 ~ 1610年
12	掘削 中層部	短冊	31A	1	0.5	11.2	-	灰オリーブ 5YR/2	灰オリーブ 5YR/2	灰白 2.5Y7/1 ナシ	(内外) 黒釉	-	古瀬川 1610 ~ 1650年
13	古瀬	短冊	28A	1	0.5	12.3	-	赤 2.5Y5/3	赤 2.5Y5/3	灰白 2.5Y7/2 ナシ	(内) 赤 内) 黒釉	-	15C 後半 - 16C 前半
14	古瀬	短冊	28A	16	0.5	12	-	灰オリーブ 5Y5/2	灰オリーブ 5Y5/2	灰白 5Y7/1 ナシ	(内) 黒釉	縁線あり	15C 後半 - 16C 前半
15	古瀬	磨製陶器類	31A	6	0.5	-	-	オリーブ 10YR6/2	オリーブ 10YR6/2	灰白 5Y7/1 ナシ	(内外) 赤黒釉	-	後述の短冊 15C 後半
16	古瀬	六角形	30Z	15	0.5	8.2	-	灰白 10YR6/2	灰白 10YR6/2	灰白 10YR6/2 ナシ	(内) 赤 黒釉	-	古瀬川 15C 後半 - 16C 前半
17	古瀬	六角形	30A	21	0.5	10.2	-	赤 2.5Y7/2	赤 2.5Y7/2	5YR6/2	(内外) 赤 黒釉	縁線あり	古瀬川 16C 代
18	古瀬	積石台 高脚短冊	31A	1	0.5	-	3	灰白 NR	灰白 NR	灰白 2.5YR/1 ナシ	(内外) 赤黒釉	-	古瀬川 15 後半
19	古瀬	甕	31A	6	0.5	10.9	-	灰白 10YR6/1	灰白 10YR6/1	灰白 2.5YR/1 ナシ	(内) 灰黒釉	-	古瀬川 15C 後半 - 16C 前半
20	掘削 表層部	短冊小皿	30A	21	0.5	10.8	-	オリーブ 10YR6/3	にじみ 10YR6/3	にじみ 10YR7/3	(内) 黒釉	-	古瀬川後遺跡 1440 ~ 1480年
21	掘削 表層部	短冊小皿	30A	6	0.5	10.6	-	オリーブ 7.5YR/2	オリーブ 7.5YR/2	灰白 2.5Y7/1 ナシ	ロケット 11.5YR7/2	-	古瀬川 1500 ~ 1630年
22	掘削 表層部	短冊小皿	31A	1	0.5	-	4.9	オリーブ 7.5YR/2	灰 2.5Y7/2	灰白 2.5YR/1 ナシ	(内) 黒釉	-	古瀬川 1500 ~ 1630年
23	1層目 土層	甕 (ロケット)	31A	12	0.5	7.8	1.8	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2 ナシ	ロケット 10YR8/2	-	ロケット
24	1層目 土層	甕 (ロケット)	30A	22	0.5	11.8	-	灰白 10YR8/2	灰 10YR8/2	灰白 10YR8/1 ナシ	ロケット 10YR8/1	-	ロケット
25	1層目 土層	甕 (ロケット)	29Z	10	0.5	-	7	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2 ナシ	ロケット	-	ロケット
26	1層目 土層	甕 (子づつむ)	28A	16	0.5	8.8	-	にじみ 10YR6/3	にじみ 10YR6/3	にじみ 2.5Y5/3	(内) 赤黒釉	-	子づつむ
27	1層目 土層	甕 (子づつむ)	31A	6	0.5	9.9	-	灰黒 10YR6/3	灰黒 10YR6/3	灰白 10YR4/1 ナシ	(内) 赤黒釉	-	子づつむ
28	1層目 土層	甕 (子づつむ)	28A	1	0.5	12.9	-	灰白 10YR8/2	にじみ 10YR8/2	灰白 10YR8/2 ナシ	子づつむ	外面黒	子づつむ
29	1層目 土層	甕 (子づつむ)	28A	2	0.5	14.4	-	灰 2.5Y7/2	灰 2.5Y7/2	灰白 2.5Y7/2 ナシ	(内) 赤黒釉	外面黒	子づつむ 15 後半
30	掘削 表層部	甕	30A	2	0.5	11.9	-	灰白 7.5YR/1	灰白 7.5YR/1	灰白 5YR/2 ナシ	(内外) 赤黒釉	-	17C 前半
31	掘削 表層部	水日本朝	31A	7	0.5	-	5.8	オリーブ 5YR/4	オリーブ 5YR/4	灰白 2.5Y7/1 ナシ	ロケット 10YR6/2	-	古瀬川 15 後半
32	古瀬	甕	30Z	15	0.5	-	-	オリーブ 2.5G/1	オリーブ 2.5G/1	灰白 NR/ 2.5G/1	(内) 赤 黒釉	-	古瀬川 15 後半

観 察 表

遺物観察表 中近世土器・陶磁器 (2)

(黒土・黒・赤黒、黒・黒、白・白色胎子、赤・赤色胎子、白・黒胎子、白・黒胎子、黄・黄胎子、黄・黄胎子)

調査番号	名称	形状	アット	単位	数量 (個)	色別		胎子	製作時期	使用時期	備考
						外底	内底				
33	瀬戸 灰陶器	磁鉢	20A	16	0	-	-	黒 2.5YR/4	黒 2.5YR/2 ツツ	内 1.5YR/2 ツツ	古瀬戸類目-15期
34	瀬戸系 磁器	鉢	31Z	5	0	11.8	-	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	古瀬戸系 1500～1600年代
35	瓦器	磁鉢	29Z	25	0	-	-	黒 7.5YR/4	黒 7.5YR/4	黒 10YR/7	瀬戸系類目- 14C末～15C前半
36	瓦器	磁鉢	28A	17	0	-	-	黒 7.5YR/6	黒 7.5YR/6	黒 7.5YR/6	瀬戸系類目- 14C末～15C前半
37	陶磁器	煮(行)器	29Z	5	0	45.4	-	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	瀬戸系類目- 14C末～15C前半
38	陶磁器	煮(行)器	29Z	20	0	44.4	-	黒 N6/1	黒 N5/1	黒 N6/1	古瀬戸系 14C末～15C前半
39	陶磁器	煮(行)器	29A	1	0	-	-	黒 N6/1	黒 N7/1	黒 N7/1	-
40	陶磁器	煮(行)器	28A	17	0	-	10.5	黒 N6/1	黒 N5/1	黒 7.5YR/1	古瀬戸系 14C末～15C前半
41	陶磁器	小鉢(灰質)	28A	17	0	-	7	黒 N6/1	黒 N6/1	黒 N5/1	-
42	瀬戸系 磁器	皿(白)	29Z	25	0	9.4	-	黒 7.5YR/4/2	黒 7.5YR/4/3	黒 7.5YR/4/2	古瀬戸系 14C末～15C前半
43	瀬戸系 磁器	皿(白)	30A	11	0	11	-	黒 7.5YR/3/2	黒 7.5YR/3/2	黒 7.5YR/3/2	古瀬戸系 14C末～15C前半
44	瀬戸系 磁器	皿(白)	27A	16	0	-	10	黒 7.5YR/4/1	黒 7.5YR/4/1	黒 7.5YR/4/1	古瀬戸系 14C末～15C前半
45	陶磁器	片皿	29A	17	0	-	-	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	古瀬戸系 14C末～15C前半
46	陶磁器	片皿	29A	11	0	-	-	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	古瀬戸系 14C末～15C前半
47	陶磁器	片皿	29A	7	0	-	-	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	古瀬戸系 14C末～15C前半
48	陶磁器	片皿	29A	21	0	36	-	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	古瀬戸系 14C末～15C前半
49	陶磁器	片皿	29A	21	0	37.6	-	黒 N6/1	黒 N5/1	黒 N6/1	古瀬戸系 14C末～15C前半
50	陶磁器	片皿	28Z	10	0	-	14.4	黒 N6/1	黒 N5/1	黒 N5/1	古瀬戸系 14C末～15C前半
51	瀬戸系 磁器	磁鉢	30A	2	0	-	12	黒 7.5YR/4/2	黒 7.5YR/4/2	黒 10YR/7	古瀬戸系 14C末～15C前半
52	陶磁器	煮(行)器	30A	7	0	-	-	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	古瀬戸系 14C末～15C前半
53	陶磁器	煮(行)器	28A	22	0	-	-	黒 N6/1	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	古瀬戸系 14C末～15C前半
54	瀬戸系 磁器	鉢	30A	2	0	-	4.7	黒 7.5YR/3	黒 7.5YR/3	黒 7.5YR/2	古瀬戸系 14C末～15C前半
57	瀬戸系 磁器	煮(行)器	30Z	15	0	11.8	-	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	黒 7.5YR/1	古瀬戸系 14C末～15C前半

遺物観察表 弥生時代～古墳時代土器

(単位：上=右長、中=右長、下=全長、※=彩色土器、○=破損)

報告番号	種別	用途	番号	サイズ		形状	法線 (mm)	口径		底径		包蓋		胎土		備考	
				大	小			口径	底径	外面	内面	胎土	表面	裏面			
58	甕 (赤黒)	-	-	30A	21	皿	19.2	-	-	-	-	広島・瀬戸 10YR7/3 右・赤	広島・瀬戸 10YR7/3 右・赤	ナナ	ナナ	-	備録: 14.5a
59	甕 (赤黒)	-	-	30A	16	皿	20.0	-	-	-	-	広島・瀬戸 10YR7/3 右・赤	広島・瀬戸 10YR7/3 右・赤	ナナ	ナナ	-	備録: 17.5a (内) 備録
60	甕 (赤黒)	-	-	30A	12	皿	13	-	-	-	-	広島・瀬戸 10YR6/3	広島・瀬戸 10YR6/3	ナナ	ナナ	-	
61	甕 (赤黒)	-	-	25A	11	皿	22	-	-	-	-	広島・瀬戸 10YR6/3	広島・瀬戸 10YR6/3	ナナ	ナナ	-	
62	甕 (黒)	-	-	29A	2	皿	11.6	-	-	-	-	広島・瀬戸 10YR6/3	広島・瀬戸 10YR6/3	ナナ	ナナ	-	備録: 2.5a (内) 備録 (黒) 備録
63	甕	-	-	31Z	11	皿	-	-	-	-	-	広島・瀬戸 10YR5/4	広島・瀬戸 10YR5/4	ナナ	ナナ	-	
64	甕	-	-	31Z	11	皿	14	-	-	-	-	広島・瀬戸 10YR5/4	広島・瀬戸 10YR5/4	ナナ	ナナ	-	
65	甕	-	-	30Z	10	皿	-	-	-	-	-	広島・瀬戸 10YR6/3	広島・瀬戸 10YR6/3	ナナ	ナナ	-	備録: 11.0a
66	甕	-	-	30A	7	皿	-	-	-	5.3	-	広島・瀬戸 2.5Y6/3	広島・瀬戸 2.5Y6/3	ナナ	ナナ	-	(内) 備録
67	高坏 甕付	-	-	29Z	25	皿	14.0	-	-	-	-	広島・瀬戸 7.5YR6/4	広島・瀬戸 7.5YR6/4	1.5a	1.5a	-	(内) 備録
68	高坏	-	-	29A	21	皿	-	-	-	-	-	広島・瀬戸 10YR7/3	広島・瀬戸 10YR7/3	1.5a	ナナ	-	(外) 備録
69	高坏	-	-	29A	16	皿	-	-	-	-	-	広島・瀬戸 10YR7/3	広島・瀬戸 10YR7/3	1.5a	ナナ	-	(外) 備録
70	高坏	-	-	27A	21	皿	-	-	-	-	-	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	ナナ	ナナ	-	(外) 備録
71	高坏	-	-	30A	17	皿	-	-	-	-	-	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	ナナ	ナナ	-	備録: 1.5a
72	高坏 甕付	-	-	29Z	25	皿	-	-	-	10.8	-	広島・瀬戸 10YR6/3	広島・瀬戸 10YR6/3	ナナ	ナナ	-	(外) 備録
73	高坏 甕付	-	-	29A	22	皿	-	-	-	14.8	-	広島・瀬戸 7.5YR6/3	広島・瀬戸 10YR7/2	1.5a	1.5a	-	備録 (内) 備録

遺物観察表 石器・石製品、銅冶関連遺物

報告番号	種別	分類	形状	用途	サイズ		厚さ (mm)	重量 (g)	備考			
					大	小						
75	片断状石片	-	安山岩	-	31A	1	皿	65	78	16	91	
76	磨石形石片	磨石形磨石	ヒソ岩	-	30A	11	皿	90	126	14	181.9	
77	石核	片断状石片石核	安山岩	-	28A	7	皿	94	171	40	750	
78	石核	片断状石片石核	高浜岩	-	31A	1	皿	92	76	22	243.9	
79	磨石	-	砂岩	-	28A	7	皿	173	77	58	1000	
80	原石	-	ヒスイ	-	31A	12	皿	16	9	6	1.4	
85	土製品	銅冶	-	-	29Z	30	皿	48	52	31	65.0	
87	銅冶関係	銅冶	-	-	29A	7	皿	100	74	38	331.7	

遺物観察表 銭貨

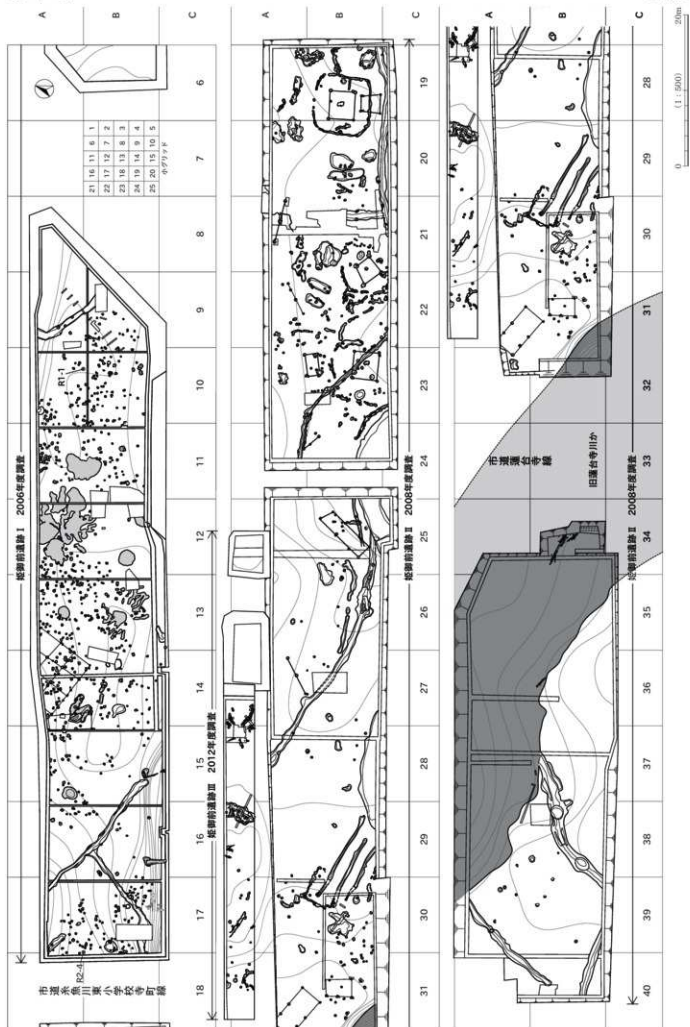
報告番号	銭貨名	種別	正額	鋳年	サイズ		形状	外直径	外半径	内径	内半径	重量 (g)	備考
					大	小							
81	天竺三尊	豪族	北条	1023	30A	21	皿	24.0	24.5	5.8	5.9	1.3	3.48
82	高野原	豪族	北条	1095	29A	21	皿	24.3	24.1	7.5	7.7	1.2	3.05
83	高野原	豪族	北条	1096	29A	17	皿	24.3	24.1	6.7	6.9	1.2	2.00
84	高野原	豪族	北条	1098	28A	21	皿	23.3	23.5	5.9	5.8	1.4	3.36
85	高野原	豪族	北条	1111	31A	6	皿	24.8	25.0	6.4	6.4	1.6	2.65

遺物観察表 木製品

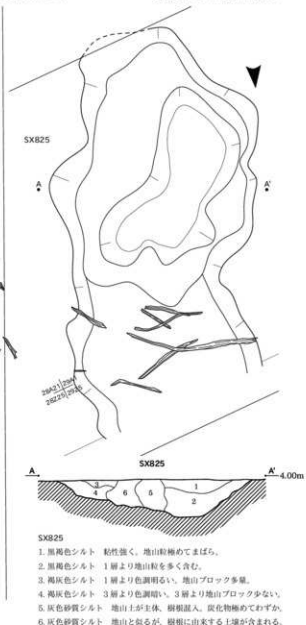
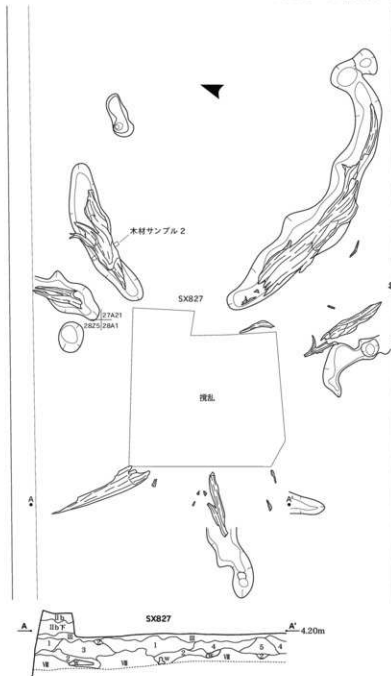
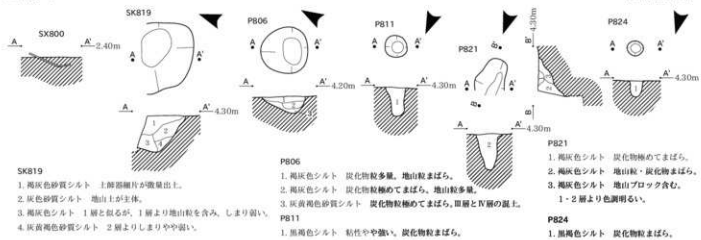
報告番号	種別	材料	形状	用途	サイズ		厚さ (mm)	重量 (g)	備考		
					大	小					
88	漆柱	大牙	楕円	SK300	29A	22	皿	236	6	5	
89	漆柱	大牙	楕円	-	29A	1	皿	100	6	4	

图 版

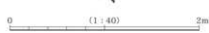
全体図



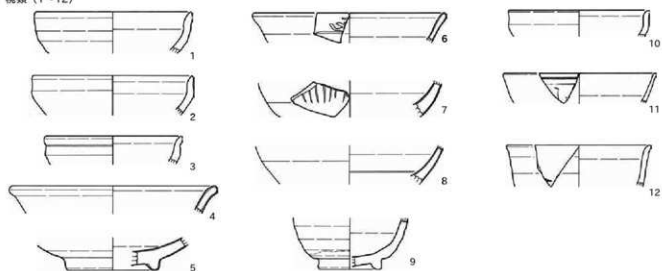




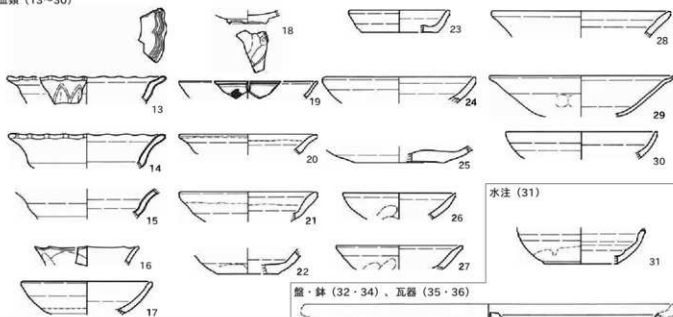
- SKB27**
1. 灰色砂質シルト 地山土が主体。土層上ブロックがまばら。
 2. 灰黄褐色シルト 腐植が土壌化。粘性やや強い。2層には腐植が残る。
 3. 灰色砂質シルト 地山土が主体。1層より土層土が多い。
 4. 高灰色シルト 1層・5層より色調暗い。土層土が主体。地山ブロックまばら。
 5. 灰黄色砂質シルト 土層と土層の間に。



楕類 (1~12)



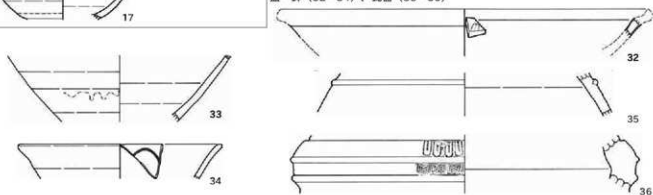
皿類 (13~30)



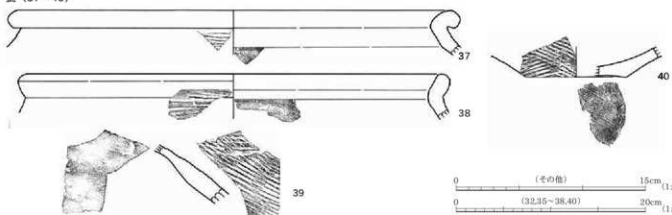
水注 (31)



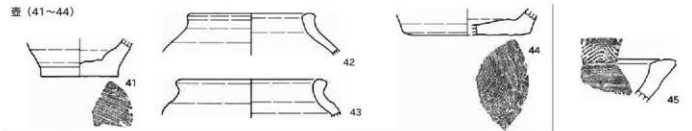
盤・鉢 (32・34)、瓦器 (35・36)



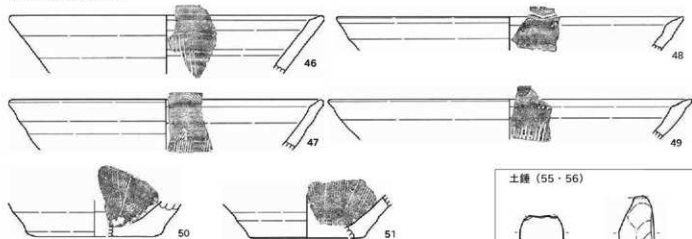
甕 (37~40)



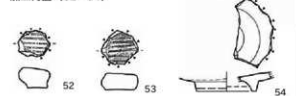
壺 (41~44)



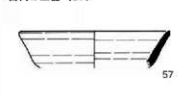
片口鉢・撞鉢 (45~51)



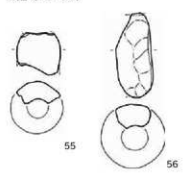
加工円盤 (52~54)



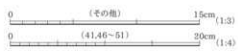
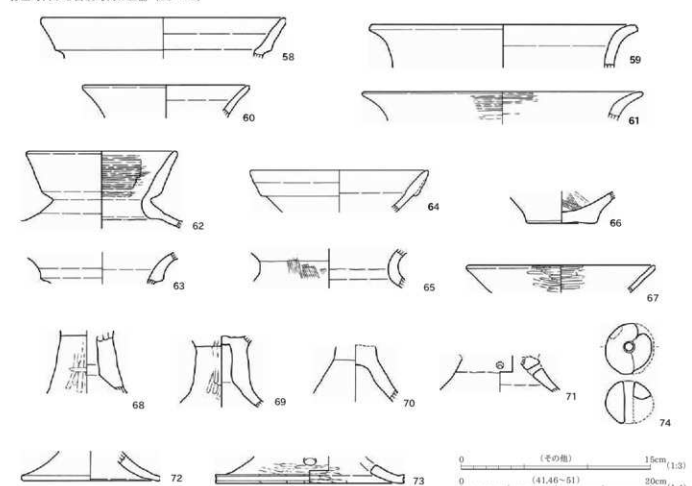
古代の土器 (57)



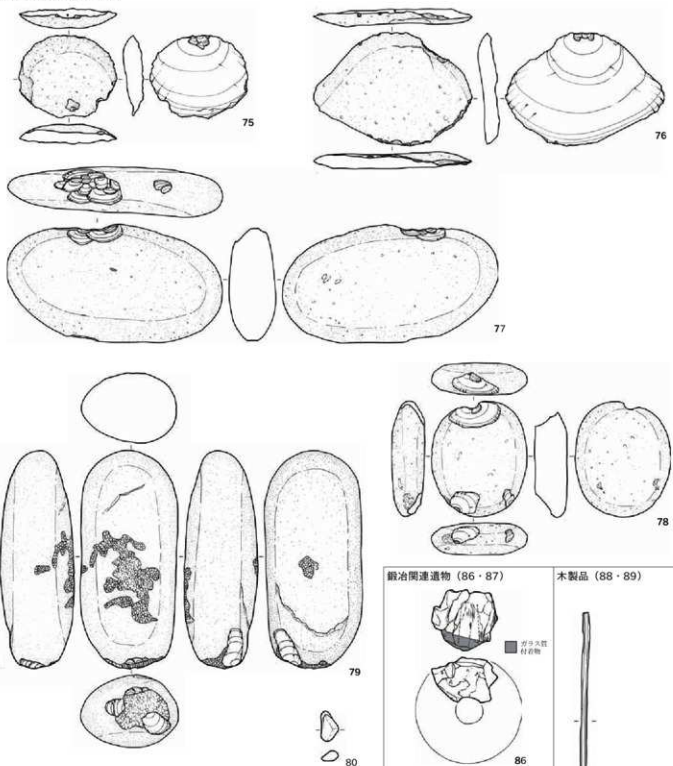
土罐 (55・56)



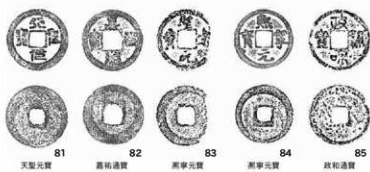
弥生時代から古墳時代の土器 (58~74)



石器・石製品 (75~80)



銭貨 (81~85)



81 天聖元寶

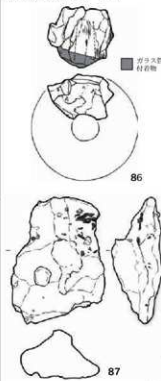
82 嘉祐通寶

83 熙寧元寶

84 崇寧元寶

85 政和通寶

鍛冶関連遺物 (86・87)



木製品 (88・89)



0 (81~85) 6cm (2.3) 0 (86) 10cm (1.2) 15cm (1.3)



遺跡近景（東から、2008年撮影）



7区 全景（西から）



遺跡近景（西から、2008年撮影）



遺跡近景（西から）



7区 全景（東から）



8区 全景（南東から）



樹根SX827 検出状況（北から）



樹根SX827 検出状況（南東から）



基本層序②・樹根SX826 検出状況（南から）



樹根SX826 検出状況（南東から）



SX825 検出状況 (南西から)



SX825 完掘 (南から)



P806 断面 (西から)



P806 完掘 (西から)



P811 断面 (北から)



SK819 断面 (西から)

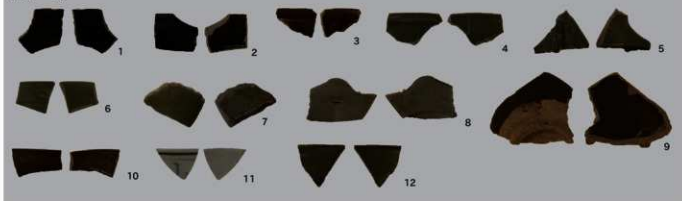


箸状木製品 (88) 出土状況 (西から)

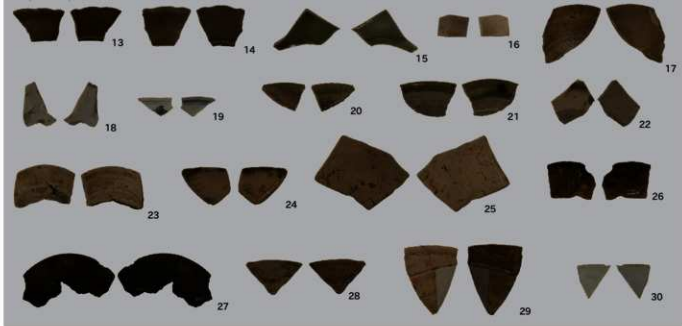


銭貨 (81) 出土状況 (南から)

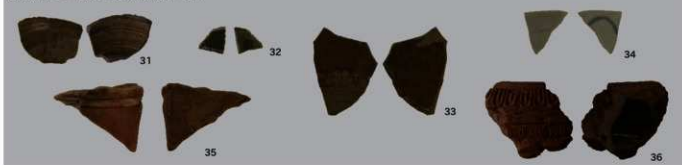
椀類 (1~12)



皿類 (13~30)

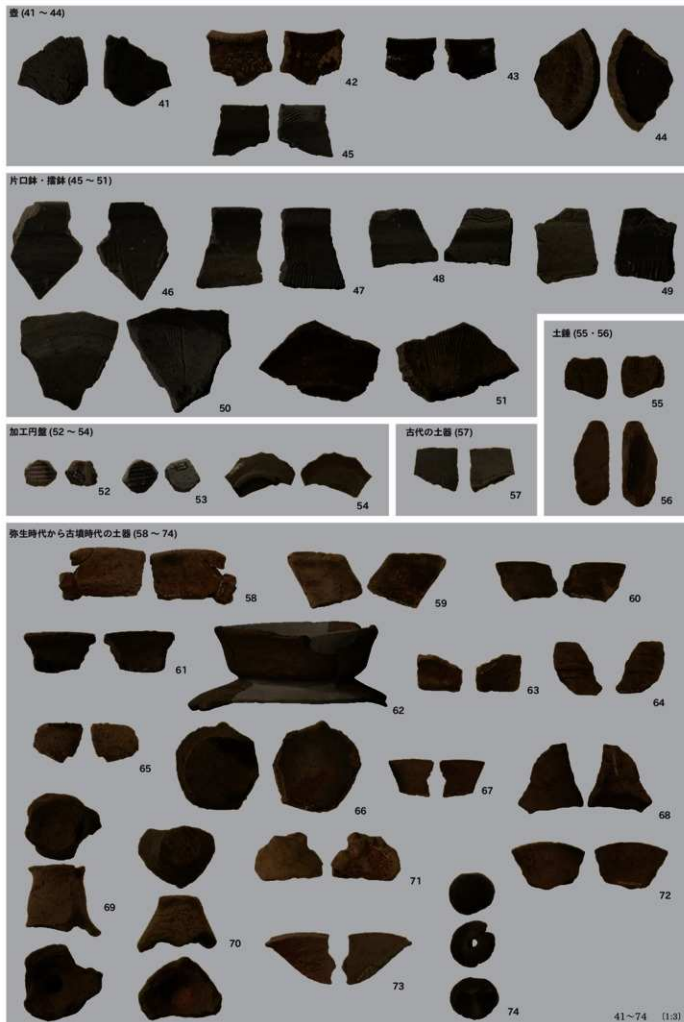


水注 (31)、盥・鉢 (32~34)、瓦器 (35・36)

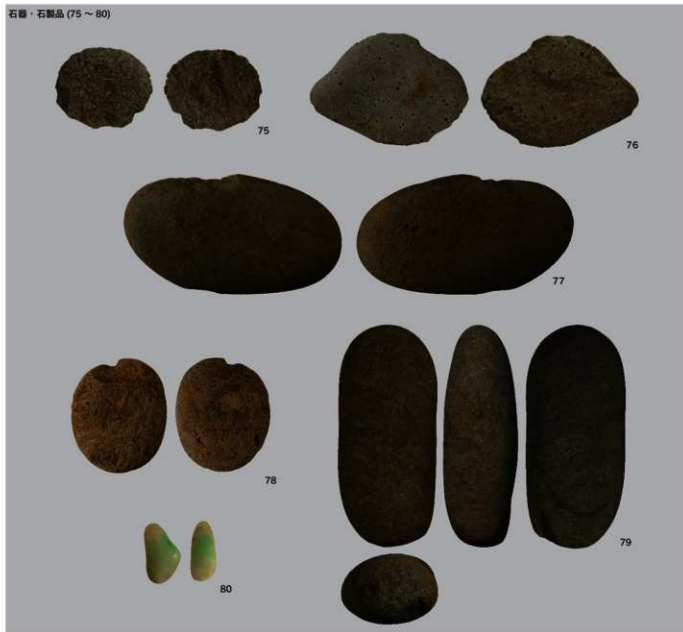


甕 (37~40)

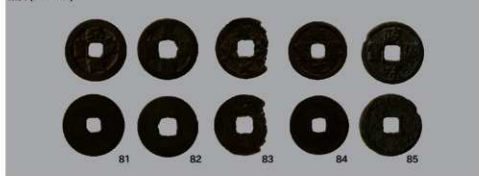




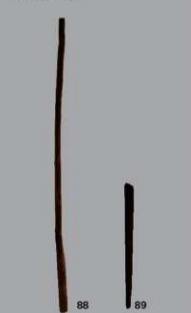
石器・石製品 (75 ~ 80)



銭貨 (81 ~ 85)



木製品 (88 ~ 89)



鍛冶関連遺物 (86 ~ 87)



80 (1.1)
81~85 (2.3)
その他 (1.3)

報告書抄録

ふりがな	ひめごぜいせきさん						
書名	姫御前遺跡Ⅲ						
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書						
巻次	XXIII						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第244集						
編著者名	加藤学（理文事業団）、石垣義則（株式会社ノガミ）、株式会社加速器分析研究所						
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL. 0250(25)3981						
発行年月日	2013（平成25）年3月22日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード			調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯			
新島県糸魚川市 東守町二丁目 1069番地1ほか	15216	24	37° 02' 33" (新座標)	137° 52' 24" (新座標)	20120702 ～ 20120824	227㎡	北陸新幹線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
姫御前遺跡	遺物 包含地	中世～近世			陶磁器（青磁・白磁・青花・瀬戸美濃・珠洲・越中瀬戸・肥前系磁器・土師器）、土師、鉄貨、鉄洋、木製品		
	集落跡	弥生時代後期～ 古墳時代前期	ピット4基 土坑1基		土師器、石器（横刃形石器・蔵石）		検出したスギの樹根について放射性炭素年代測定を行った。その結果、弥生時代中期～後期頃に結実していることが分かった。この頃に開墾が行われた可能性がある。

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第244集

北陸新幹線関係発掘調査報告書XXIII

姫御前遺跡Ⅲ

平成25年3月21日印刷

編集・発行

新潟県教育委員会

平成25年3月22日発行

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1

電話 025(285)5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250(25)3981

FAX 0250(25)3986

印刷・製本

株式会社 ハイソグラフ

〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号

電話 025(233)0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第244集『姫御前遺跡Ⅲ』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	37度02分33秒	37度02分44秒
抄録	東経	137度52分44秒	137度52分15秒